

意候由、以書狀被申越候付、修理亮・治部少輔所迄拙

者見舞候而一礼申置候、右之通ニ 近衛様御家傳此御

方之御家傳ニ無相違候儀、猶々結構成御儀与乍憚奉存

候、右兩人江出會候節者伊集院主水儀茂一座ニ罷有、

兩人より[◎]之^乙 挨拶茂承置せ申候、又京都へ罷有候阿部豊

後守様其外御大名様方々より御扶持被下置候有職者ニ

吉益彦太郎与申者私以前より能為存者ニ而御座候、此

者江今度出會申候処ニ、咄之縁語より 忠久様住吉へ

御誕生被成御座候を 近衛様御車ニのせられ御帰京候

而御取立候由承傳申事ニ候与物語仕候、旁右之件ニ候

得者、此御由緒之儀者此御方江申傳候通何方ニ而茂違

説無之儀かと奉存候、修理亮・治部少輔江拙者より遣

候書付、又者兩人より之書狀差越申候、右之段々可被

達 貴聞置儀与被思召候ハ、何分ニ茂宜御取成奉願

候、恐惶謹言、

(元禄十三年)
三月九日

鳴津圖書様

鳴津勘解由様

鳴津主計

忠雄 (花押)

新納美作様

(本文書ハ「日記雜錄追録」二七〇七号文書ト同一文書ナルベシ)

167の4

〇一

近衛様御家老進藤修理亮・今大路
治部少輔より依所望遣候書付之扱

裏張紙朱ニ而

薩摩守家之元祖嶋津豊後守忠久者、右大将頼朝卿之長
子、頼家卿・實朝卿之庶兄ニ而御座候、母者比企判官

能員妹丹後局ニ而候、密妾懐胎之儀を御臺所嫉妬被成

候付、丹後局上方江趣、攝州住吉江被參掛候節産氣催

候故、旅宿を求候得共、許容仕者無之付、不得已住吉

社邊之於石上男子を被致誕生候、是則右之忠久ニ而御

座候、折節 御家門様御社參被成候處、社邊児啼相聞

得候付、御人を被遣被為見候得者、右之次第ニ候故、

取揚候様ニ被仰付京都江被召列候、丹後局事其後惟宗

民部大輔廣言ニ嫁候付、忠久繼父廣言ニ被育、惟宗之

姓を冒罷有候、然処ニ承久三年辛巳六月、從 基通公

蒙御恩免御氏族与罷成、于今舊好之一筋乍憚斷絶不仕

候、當薩摩守より五六代以前之先祖共迄者、任官受領

等之節者 御家門様御推挙ニ而御座候、元暦二年忠久

七歳之時始而謁 頼朝卿候處、為食祿勢州波出御厨・同國須可御庄を^被下、又翌文治二年忠久八歳之時嶋津庄薩摩・大隅・日向三ヶ國之被補地頭職、同年八月薩州江下向仕候、右之通、幼稚ニ有之候得共 頼朝卿御實子之故早速厚祿為被下置事ニ御座候、 頼朝卿之御下文^等數通于今有之候、以上、
(元祿十三年) 三月

(本文書ハ「旧記雜錄追録二七〇四号文書ノ一部ナルヘシ」)

昨日得御使札之處入夜下宿、御報及遲引候、先以琉球之産花籠御投下辱令感佩服、并御目錄彼是御懇篤^之模様謝義不能短筆候、如來教先日者寛之得御意、殊御両家御由緒之事委細承之、不堪感悦之至候、即達 両公御聞候処御甘心不淺候、連之御閑暇之節、安元・治承之頃又承久三年之御記等御閑覽之上、於有所見者重而可被仰聞之旨御氣色候、先夜申請候御書記之物即 御前に被留置候、昨夜蓮光院御入來、右之段委ク申談候条不能多端候也、恐惶謹言、

進藤修理亮
(長之)

(元祿十三年)
 三月七日
 寫津主計様
 拜復
(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄追録二七〇六号文書ト同一文書ナルヘシ」)

尚之御用中寛之得貴意欣然之至候、▽昨日△及深更帰家、御報及遲滞候、以上、

御札致拜見候、如貴諭前夜者始而得賢慮大慶仕候、抑御家傳之事御書記、則入 両公御覽候處、御感心之御事候、連之御旧記被相考、重而可有御沙汰之旨候、将亦奇物并御目錄之通御惠賜辱祝納仕候、恐惶謹言、

(元祿十三年)
 三月七日
 嶋津主計様
 今大路治部少輔
(花押)

嶋津主計様
 今大路治部少輔
孝在

(本文書ハ「旧記雜錄追録二七〇五号文書ト同一文書ナルヘシ」)

九月四日林大学頭殿江參候之節、御家之譜略于今石野八兵衛殿より不來之由大学頭殿被仰二付、私申候ハ、

心覺

いまた八兵衛殿迄も参間敷候、只今最中清書之由ニ御座候、其上書写一通りにて能今有御座ニ、不被言裝潢等迄段々御念入候様ニ承及候と挨拶申、扱 忠久公之御事東鑑之通計ニ而ハ頼朝卿之御子と不奉見候条如何◎想与尋候所、大學頭殿被仰候者、兼而被存候よりハ慥成御系圖、第一奥州陣之節頼朝卿より畠山重忠江之下文何方之系譜ニ茂無之證文、殊昌平坂之文庫ニ御納之上者末代迄相残ル物ニ御座候故、御家之御重宝不過之、御念入被仰付段尤なる被遊様ニ被存由ニ御座候間、弥以御仕立等迄被入御念被仰付様ニと奉存候、已上、

朱ニテ

元禄十三年

十一月十四日

菊池新三郎

菊池藤助様

〔本文書ハ「旧記雜録追録」二八四二号文書ト同一文書ナルベシ〕

文化二年
近衛様 江御由緒之儀京都御留守居を以御内々御尋之趣

有之候書付写

御記録類御吟味有之候處、元禄十三年之比御縁組御願之節御由緒之事 公邊江被仰達候節、松平薩摩守殿元祖忠久御事者近衛殿先祖普賢院關白基通公御猶子藤氏ニ被成、其後御通路無断絶、惠雲院關白植家公・東大院関白前久公以來御親有之事ニ御座候、以上、

十二月

右之通被書出候而、則蓮光院江被仰達、蓮光院より早速關東ニ而薩摩守様江申上候事ニ候得者、後法興院殿政家公文明十四年之比、嶋津家之一族村田肥前守經安國主之下知ニ而 御家門江祇候有之候事、御由緒有之ニ付テト云々、右等之外時々御通路往來之事共有之候得共、子細者不分明、御記録者其節々之御主人様御直筆ニ而、先は

朝廷之儀而耳多、世俗之事ニ抱候事ハ少ク取雜有之事故、書拔候事茂難致御座候、何分御由緒厚キ儀者世上ニ茂存之通之事ニ而、可書拔程之事別ニ無御座候、此趣御合被成可被仰上与存候、

木村石京

近衛様於御殿木村石京面會承候趣左ニ申上候、

一此間より度々被仰聞趣餘り及延引候、基通公御日帖之内段々致拜見、住吉社御參詣之儀ニ而茂被記置候哉与心掛相糺候得共、御日帖之儀者御代々様御直筆ニ而

朝廷之事而已御記有之、目錄之様ニ而御書留一卜通り之事多相見得候、諸大夫中ニ茂及内談候処、

朝廷御用之外者御日記之寫御書出無之候間、右京臨見之趣御物語申候而御書留被成候筋ニ致度承候、依之餘り急埒不仕、其上御側・御納戸旁之儀、立野・木村兩人ニ而隔日代合相勤候哉ニ推察仕候、御日記拜見茂数冊之事故延引仕候旨存付候ニ付、去年被仰渡置候通、其程合ニ應御前より御頼之筋ニ而茂取計候様承知仕候間、極内々右京迄申試候処、夫ニ而者却而不宜、内府殿江茂御手前御願之筋ニ而得与御聞濟ニ而、諸大夫中ニ茂承知之事ニ御座候、猶又

(號)
三貌院殿御日記杯可相糺旨承、其後參殿仕候處、右京

罷出餘り延引ニ相成御氣之毒ニ御座候半与存、段々其外之書留相糺候處ニ、公邊江被差出候書留見當写取候由別紙相渡候、右之序ニ承候趣、

一後法興院關白政家公御日記之内ニ候桂姫事、

御殿江御出入之者ニ而、嶋津家江御由緒ニ付願出、御取持被仰進罷出候筋ニ相見得候、

一信尹公天正之比之御日記ニ、嶋津中納言入來、一信尋公御元服之御記録ニ、嶋津人質より為祝儀太刀・

馬代、

右様ニ目錄同前ニ誠ニ荒々鋪御記有之、書拔茂難被致、就中往古戰國之砌之儀者

朝廷之儀而已御記有之候、尚御代々様御記録之内ニ見當候而、御見合ニ茂可相成儀者追々為御知可申旨承候ニ付、此等之趣申上候、以上、

但右京相渡候書付相添差上候、

十二月廿五日

岩切賀藤次

勘解由様

勝浦姫来証

八十三年 貞昌 久門 重種
中絶 國貞 紹益

元和 巳九月四日 貞昌
方 神無月十二日 重種 國貞 久幸

紹嘉宛

二月廿四日 國貞 紹益

壬子 慶長十七年十月十二日 重種

國貞 久幸

寛永十三丙子至江戸、

170 寛保二年戊戌六月十三日

山内寺江有由緒神社書出帳

御屋地
一若宮大明神

但 忠久公御尊形冠御装束ニ而御座候、

右棟札之儀者御方留有之由承候ニ付召置申候、神領等無御座候、何比建立之年間相知不申候、兩度之御祭有之、十一月十五日計り山内寺より座主御勤ニ而、兼而者西前寺門百姓九左衛門代花香掃除相勤申候、札改帳面ニ相知為申儀ニ而無御座候、

右通、野田噯等より山内寺へ大躰書付遣候帳ニ有之、

171 在史局

野田屋地村若宮大明神由來之儀、 忠久様初而 御入

部之砌、右在所江被遊御座候御屋敷其紛無御座由候、

然者御供仕被罷下候市來崎之何某 忠久様御尊形建立

仕、 若宮大明神与奉安置候由申傳候、依之右市來崎

氏神之由唱來候、御尊形之様子者冠装束ニ而被遊御座

候、右座主西前寺と申候、則御宮之脇へ有之候、天正

年來迄者右寺為有之由候得共、只今者御藏入ニ罷成候、

右申傳之儀別条無御座候、以上、

元禄十年也
野田噯
五月廿七日 吉満善左衛門印

右同 橋口清左衛門

肥後仁右衛門殿

文政七年申六月廿五日

薩州出水郡

山門院野田由緒改帳

下名村之内

一 御屋地壹ヶ所

一 惣廻り拾八町四拾六間

一 惣流五町五拾三間

右御休所より子ノ方拾六町

下名村

御屋地之内

一 若宮大明神社壹宇

但御休所より子之方拾五町

御神躰 忠久公冠御装束御安置、

社領・御祭米無御座候、

二月朔日 六月十八日 十一月十五日

右三度輕キ御祭仕候、

右御屋地之儀、 忠久公多年御在城、其舊跡御屋地与

相唱申候、當日若宮大明神御鎮座、座主西前寺御宮之

別當 山内寺

脇江天正年來迄者慥ニ為有之由候得共、當分御蔵入地
ニ罷成候、尤水之手口・西之御門・笠掛馬場・御植木
園と申所當分相唱申儀紛無御座候、然處寛政二年戌九
月寺社御奉行所より御糺方有之、其次第棟札ニ相知申
候、

173 右同帳寛保二年戌六月十三日野田嘜書出

一 稻荷大明神

右先年者野田之内ニ而御座候処、高尾野与申外城慶長
年來被召立、當分高尾野之内ニ而御座候、 惟新様よ
り御寄進高五石為有之由候得共、當分無御座候、尤
忠久公御入部之砌より御建立之由候、

右ヶ條之趣相知候分大躰書付差越申候、以上、

戌六月十三日 橋口伊右衛門

窪田新助

中村郷兵衛

石沢四郎右衛門

實相院

文政七年申七月名勝御糺ニ付

改帳

高尾野

下高尾野村

内野之 段ノ原 横峯 野添 本城 下高尾野

外者不写、

地頭仮屋元より午ノ方廿貳町廿間 代宮司

稻荷大明神

野添村中廻合

一 本地如意輪觀音木像座像高サ六寸

但作者相知不申候、

一 鏡一面金像之地蔵高サ一寸

但同断、

一 御祭り十一月五日

一 御神酒
一 御神供
一 御祈願

一 祭り米貳斗

但所中より差出申候、

一 神領高并寄附高無御座候、

右者勸乗之年号并由緒等相知不申候、尤寶物并申傳等

(讀カ)

無御座候、

郷土年寄

出水源左印

申七月

右同

税所宮助印

名勝再撰方
御役所

175 正文在山内寺

知行目録

薩州野田村之内

高五石

浮免

右之知行稻荷為神領被成寄附早、全有領知而向後御
神事公役無緩可被相勤者也、

慶長十九年八月二日

伊兵部少輔
貞昌印

三諸右衛門尉
重種印

比紀伊守
國貞印

町勝兵衛尉
久幸

山内寺

176 正本在山内寺

返地

本高
五石

在口裏
山内寺領

薩州出水郡野田村之内知行名寄

一 浮免

桶きり丸 せ町十一

上田九畝拾歩

蒔七升四合
籾九俵二斗

山内寺

金兵衛尉

麦生田八畝 せ町九ツノ内

下々田廿八歩

蒔七合
籾一斗六升二合

八弥太

鬘の川 せ町四ツ

下田二畦六分

蒔一升七合
籾一俵一斗

山内寺

弥右衛門尉

合壹段二畦十四分

籾大豆拾一俵一斗一升二合

高ニシテ三石七斗七升三合

以上

元和三年正月廿七日

椀山權左衛門尉印
(欠高)

寛保二戌六月十三日山内寺江有由緒神社書出帳まで八
右目録等未写出なり、

177

享和二年戊三月野田中神社佛閣舊跡其外諸しらへ帳

下名村之内石走り
一稻荷

但御休所より方角子方町数三拾五町四拾間程

一 正躰石

一 勸請年鑑相知不申候、

一 神領并寄附高無御座候、

一 祭日十一月十七日

下名村之内枝村
一屋地村

但御休所より方角子方町数拾六丁程

外前後不写、

右之通所中相しらへ帳面相調差上申候、以上、

戌三月

社人
木上伊膳印
郷土年寄
濱田五右衛門印
郷土年寄
中村長右衛門印

178 寛政七年卯十二月十五日

所中小堂社帳

野田

一 稻荷大明神社一字

社人
木上伊膳

但地頭仮屋本より子方三拾五町四拾間

一 十一月十七日神事執行仕候、

右下名村之内石走り与申所江建立ニ而候、御神躰者御

石、何年何月建又者由緒等之儀相知不申候、
外者不写、

右者此節御糺方被仰渡旨趣承知仕、古帳相写帳面差上
申候、以上、

但古帳文字不分明、大概写ニ而御座候、

卯十二月十五日

郷土年奇

中村長右衛門印

右同

清田鉄之進印

右同

橋口伊右衛門印

右同

石沢大右衛門印

御記録所

御書役衆中

179 文政七年申六月廿五日

薩州出水郡山門院野田由緒改帳

下名村石走り

一稻荷大明神一字

別當

山内寺

正躰鏡差渡
式寸五部

中神像壹尊長壹寸

御休所より子ノ方三十五町四十間

一祭り日二月初午日

179の1 (本文書ハ一七五号文書ト同一文書ニツキ省略ス)

右者 忠久公御建立ニ而御座候処、年鑑相知不申候、
其後慶長十九年八月二日 惟新様より御寄進高五石被
成下候処、いつ比より御取揚ニ罷成候哉、當分ニ者地
面無御座、社頭ニ茂零落仕、當分小社ニ而御座候、

右者此節薩藩名勝志再御取しらへニ付細々御ケ條書を
以被仰渡趣承知仕、細密相糺一帳ニ相認差上申候、以
上、

但所中龕繪圖壹枚并御靈屋繪圖面相添差上候、

甲申

六月廿五日

橋口清左衛門印

中村郷兵衛印

名勝志再撰方掛

御町奉行

橋口今彦殿

享保九年辰八月廿八日

薩州出水郡野田下名村御檢地竿次帳

五冊之内

180

九百六十

壹番

高八百八拾八石四斗六升貳合五夕

庄屋
吉留與兵衛

袈川
中田十六間 三畦六步

畦貳表壹升
畦貳表壹升

畦町五ツ

西前寺門

宇兵

同所

下田十壹間 五畦廿六步

畦町八ツ

植木蘭門
與右衛門

同所

中田卅二間 壹畦貳步

畦町五ツ

山内寺場門
與左衛門

袈川

上田十六間 九畦貳步

畦町四ツ

瓜田門

長左衛門

此間不写、

竿取

宮田平左衛門印

右同

堀兵左衛門印

蒔見

兒嶋市郎兵衛印

右同

中村大藏院印

筆筭

市來崎權左衛門

右同

吉留孫右衛門印

右同

中村郷兵衛印

郡見廻

石澤唯右衛門印

噯

清田武兵衛印

右通、五冊之内ニ而壹番ニ候間、五番之冊ニ其節之郡

奉行名前可有之、可差出旨申渡候処、外之帳四冊裱紙

茂無之古帳差出、袈川之門有之分左ニ書拔置也、

拾四番

袈川新門

井町

中田七間 九畝拾步

畦五表貳升

慶左衛門

かさ掛

下田十四間 八畦

赤靱表三斗四升

次兵衛

畦町九ツ

赤靱表三斗四升

五十六番 袈川新門

麦生田中畠七間半 四畦八分 大ツ式斗四升壹合

中畠式畦四步 大ツ式斗式升 半兵衛

四十四番 袈川門

辻畠 下畠九間 壹反壹畦廿式步 万兵衛

大ツ表七升式合

麦生田 山畑三間 壹畝 大ツ壹升四合

同所中畠五間 廿間三十分 大ツ壹斗三升九合

中畠壹畝廿分 大ツ六升九合 久左衛門

笠掛ヶ 下之畠十間 廿步 大ツ壹升九合 慶右衛門

笠かけ 中畠廿式間 三せ廿步 与右衛門

今村下之畠十二間半 壹反拾四步 大ツ三斗三升五合

下之畠三畝拾五步 長へ

來仙寺中畠九間 三せ廿二分 大ツ式斗一升三合

中畠壹畦七步 大ツ七升壹合 七郎右衛門

大ツ七升壹合

七郎右衛門

181

磯石カシ蓋也、礫クワク与榑同、壙墓穴也、

齊沈士麟年過八十手抄書數十篋

182 ツ帙

在市來八左衛門家

惟宗親王 慶頼王 保頼

師頼 師保

保仲 師貞 寛治三年戊辰大隅国々司初任、十月十三日下着、

頼明 正二位 中納言 正四下 大隅守 師国 時廣 正四下 四下

師隆 師行 國時 師国 時廣

五上 伊勢守 中納言 生年廿四才 行賢 父相共大隅守、下着大隅国被補正宮執印、

長慶 天養元年甲子十一月十五日入滅、

重賢 師澄 美濃守 左工門尉 行直 正宮座主

順賢 同下向、

施藥院 教親 国行 左工門尉 光國 被補任始良庄預所職畢、保安四年癸卯二月五日死去畢、

孝言タカノ字名奥州四郎

基言日向守 同国司

廣言筑後守 八文字民部大輔 島津庄住 千載集作者

島津 忠久御母丹後局

忠康息男忠綱 分国越前若狹、
母秩父畠山重嵩女、重忠姉タリ、

忠季 母丹後局

於宇治河錦戸五郎ニ被討平、忠定・忠季兄弟トモニ御一代
被開平、

女市来前兼杖家房

女勢至御前 国分左エ門尉友成

政家左衛門尉

不寫、

按猿渡古系圖、藤四郎實信傳載文治二年以劔役從 太

祖入部於薩山門、而降 寬陽公時、義岡宮内久喜躬掌

司職、朱書規之曰、太祖入部為建久七年、作文治誤也、

子孫猿渡要人信安亦與国明同其時、乃又駁其誤曰、今

史說皆決乎文治入部、據是觀之、當時史官猶未識、別

可以知、

猿渡喜右衛門系図

高望王七代

猿渡藤三郎信元

叔父比企能員カム

ホンニ依テ猿渡庄

ヲ落テ薩戸ニ下ル、

實信

信景

太郎 於小御所打死、

右猿渡氏

外ニ時代難引台文書七八通アリ、大和守信忠ヨリ
先古系圖一通アリ

『石三家辰三月十日 久喜』

宮内太輔殿朱書ニ、御下向者建久七年之筈、不審与有

之候、宮内太輔殿御文書奉行之時分迄ハ、專建久七年

之御下向之ニ説御座候間、宮内殿不審尤之儀ニ候得共、

其後文治二年ニ為相極御事ニ候得者、系圖之表ニ致符

合候事、

猿渡

村山 村山惣領者猿渡与可被呼也、

外山

○ 忠久御下向之人数代々役人之事

本田御幡奉行

御幡指左近尉

酒匂御沓役人

本ハ御幡指ハ真幸ツ、ハノ、相京

猿渡御鋌役人

方有シカ、氏久御代國合ノ合戦之

東条

時討死、其ヨリ左近尉御幡指也、

西条

鎌田

山田

御下向之御役人七人也、

永祿三年庚申十月吉日

(本文書ハ「旧記雜録後編」二一五六・一五七号文書ト同一文書ナルベシ)

右之相京方ハ愛甲ニ而御年比衆と聖榮自記ニ御座候、

吉松筒羽野之愛甲方本ハ御幡指為相勤と申事ニ可有御

座候、左候得共、前文通古系圖ニ左近尉者御幡指之役

と御元祖様御代より相見得候へハ、其後愛甲方ニ為

被仰付欵、何分難決御座候、

186 建久九年欵之御袖判御文書古写一通

在御判

久米乃次郎家願きかい□□候き、其跡をハ子息あら
ハ相傳すへきに、一人の□□^(子カ)もなきによりて、舎弟

忠重にたふへきなり、奉公の物のあとをハ御いとをし
ミあるへき事にてあるうゑ、證文を□□^(帯カ)れハ、たふへ

きなり、いまたわかき物にて、ものに心えぬところや
あるらんとおほしめせとも、ほうこうてゆのわかりな

れハ、かくおほせつかはすなり、當時者藤内康友知行
のよし申なれハ、他所をもとらせて家願か跡をハこの

□□^(◎たうし)御下文をもなしたふへけれども、忠
久かきたの所也、家願ニも御教書をつかはしてたひた

りしかハ、かくおほせつかハすなりとおほせことなり、
仍執達如件、

建久九年欵

散位平

嶋津左衛門尉

(本文書ハ「旧記雜録前編」一一八二号文書ト同一文書ナルベシ)

右、下甕長濱村之百姓早右衛門より被召上候文書也、

四番箱下

187

日本史註、按、國衛・莊園有國司・領家、賴朝奏請初置守護・地頭、掌國衛者曰国司、鎮護之者曰守護、領莊園者曰領家、巡按之者曰地頭、自是国司・領家日弱、守護・地頭日強、天下悉為武家之有、

188

(鎌田) 政佐譜 忠久主文治二丙午六月一日発駕関、八月一日下着山門院、

(酒匂)

朝景傳、文治二年八月一日下向山門院、

(猿遊)

實信文治二年八月至山門院、

189 宮ノ城柿木原氏本

進上

謀叛人事

豊後冠者義實

大夫義祐

右進上如件、

文治二年正月十五日日向国眞幸院郡司草部重兼上

190

今月四日、御家譜略序文書人之草案一通林大学頭殿江致持參、一返前ニ而讀、委細之儀申述候、御紋之支御

尋候故、申傳候ハ、六孫王ニ源姓を始而賜り候時、

清和天皇より升龍降龍を二引に直し源家之紋に賜り候、

則賴朝卿之御紋二引ニ而御座候、元祖忠久事賴朝卿之

長庶子たるにより、二引之御紋を従横に折て十字とし、

紋ニ成て賴朝卿より被下、嶋津家之紋に用來候、右之

通故、文字ニ世上にてハ二引両と書候へとも、家ニて

ハ二足龍と書候由申述候所ニ、二引之事始而御聞候、

左様之儀ニてあるへく候、これにてよく聞へ候、すれ

ハ二足之龍といふことにて、御紋もやはり二足龍をた

てよこになしたると云までニ候、次而によき学問した

ると御申、右之御用いまた終不申所へ深尾權左衛門殿

被參、其席へ被通候而大学頭殿御逢、二引之紋ハ升降

之龍にかたとるといふこと外にて不知事ニ候、如何様

右之趣を聞候てハ二足龍之状に能似申候、それを又た

てよこに直して家之紋になりたるニ候、只今致穿鑿出

し候との物語共ニ御座候、

右之通ニ御座候へハ、御紋ハ十文字と申ニてハなく、

やはり二疋龍にて〔付録たてよきに替りたるまで〕の御口ふりニ御座候、權左衛

門殿と申ハ大学頭殿門弟ニ而、評定所之御目安役被勤、

御直衆ニ御座候、以上、

元禄十三年

十一月十六日

菊池藤助

〔本文書ハ「旧記雜録追録」二八四三号文書ト同一文書ナルヘシ〕

191 市来北山新兵衛本

嶋津御庄雜掌承信重言上

欲早被停止北郷丹後房亮雅偽陳、且依関東御下知、

且任条々承伏旨、可為領家御進止由蒙御裁許、日向

方北郷圖師職即名益松并久富・林田・安永・益永・弥吉、

法樂等名主職事、

副進

一通 関東御下知状要段

右、彼亮雅先祖代々乍為御恩補之子孫、近年恣号御家

人、違背本所、動募武威、奉忽緒領家御命之間、因茲

召放件所職名田等、雖被宛行別人之、不悔先非、猶以

就令濫妨之、訴申之處、如亮雅偽陳者、當名田畠在家

山野狩倉以下所職等、先祖開發私領北郷弁濟使領之内也、而代々處分之時、雖付各々之假名、元為一領主之

跡之条、御下知田文顯然也、亮雅任相傳、所令知行也、

而不顧前々御教書、弃破天福・寬元法、改補員外仁之

間、重代御家人佗條所詮云々、此条々之内、先以件名々等、

為北郷弁濟使領之内、元一領主之跡之由、亮雅遮而自

稱、承伏分明也、其上如寬喜二年十一月日関東御下知

者、一北郷弁濟使分名田畠事、中間略之、○使弁濟職元

久元年五月時政朝臣進和与状之上、建曆元年九月義時

朝臣下知状云、所々名々恣令改定、宛補郎從云々、事

實者不隱便、宜若沒収地出來者、言上子細、可蒙裁補之

處、私改補之条如何、就中弁濟使事、不及地頭成敗者

也云々、亮雅更不可遁御下知違背、本所敵對兩罪矣、

次天福・寬元法御教書事、如文章者、或給本家領家下

知、或以社惣官下文令相傳欵、何忽可及御家人佗條

哉、但為本所現奇怪、蒙其咎者勿論可謂云々、而亮雅

不顧自身所進御教書現文、奉對于本所、及敵論對揚訴

陳之上者、前前之不○可須足高察矣、次同所進文治五

十月三日御教書・文治五年十一月日下文等事、於左兵

192 全

衛尉忠久者、于時兼帶留守職之条、如同寬喜御下知者、
東鑑、文治二年正月廿四日頼朝上帥大納言書云、重家自近衛殿賜小橋庄
被下忠久許之廣元朝臣奉書云、留守弁濟使事、自領家
預所職候畢云々、亦可例知也、

彼下文者、留守成敗之實證也、次十二月廿二日・仁治
二年十月十七日・寬元元年十一月廿日・寬元二年六月
廿四日御教書等、或弁濟使職、或林田・久富名主職、
共以本所御進止、武家御口入之所見也、全不帶武役勤
仕支證、而以何之篇可募申御家人之威哉、凡陳狀之趣
雖多子細、所詮關東御下知与亮雅自稱無相違之上者、
被停止向後濫陣、◎應任御下知之旨、可為領家御進止之由、
為蒙御成敗、重言上如件、

元德二年七月 日

下 嶋津庄内日向方住人等

仰條々

一北郷弁濟使分名田畠事

自余文章略之、

九月廿一日無年号左衛門督家假名御返事備、弁濟使事

193 全

如何仁毛領家乃御沙汰尔天候倍幾也、是尔波郡司地頭於古曾
沙汰須留事尔天候倍、其外乃庄官乃事波御意尔天候倍幾仁
候云云、以和模漢字
取要略之、又被下忠久許之廣元朝臣奉書云、留

守弁濟使事、自領家被仰付云々、於今者、可改定其職
之由被觸仰也云々、加之、弁濟使職事、元久元年五月
時政朝臣進和与状之上、建曆元年九月義時朝臣下知状
云、所々名々恣令改定、宛補郎從云々、事實者不穩便、
若沒取地出來者、言上子細、可蒙裁補之處、私改補之
条如何、就中弁濟使事、不及地頭成敗者也云々者、
寬喜二年十一月 日

北条泰時
武藏守平朝臣御判
北条時房
相模守平朝臣御判

日置兼秀謹言上

且任證文實、且依御庄例、被召尋其身、任所犯實、
欲被行所當罪、為北郷五郎兼持盜取祖父來西入道證
判坪付一通、盜◎北人之加筆、或令披見源太目代被加
證判、或披見執行刑部丞被勘發、其後永引籠懷中、

暗掠申賜弁濟使職并名田等無道子細狀、

件条粗檢案内、兼秀苟為嫡子之嫡子、有相傳道理之上、依奧入奉公、前地頭嶋津左衛門尉奉行沙汰之時、以去文治五年宛賜弁濟使職下文早、自余略之

194 在市來士北山新兵衛

兼秀申狀相副之、

在御判

嶋津北郷住人兼秀申兼持不當間事

如申狀者、兼持盜取祖父來西入道證判坪付一通、盜令加筆、掠申賜弁濟使職云々、事實者兼持之所行返々不當也、尋搜實否、所行於為實者、早可令行所當罪科給、且又弁濟使職事、尤可有御計事也、早々可令尋沙汰給之由候也、仍執達如件、

十二月廿二日

全慶奉

藤左衛門尉殿

195 全

諸國御家人跡為領家進止之所々御家人役事、御家人相

傳所帶等、雖為本所進止、無無指(程)被改易者、任先

度御教書之旨、可被申子細也、其上不事行者、可被注申関東候、若又當知行輩、於其咎出來者、以御家人役勤仕之仁、可被改補之由可被執申候、至所役者、任先例不可懈怠之由可被催、以此旨可令申沙汰給之狀、依仰執達如件、

寬元々年八月三日

御判
武藏守
(北条經時)

謹上 相模守殿

196 全

西國御家人者自右大將家御時守護人等注交名、雖勤大番以下課(役)促給關東御下文令領掌所職輩不幾、依為重代之所帶、隨便宜或給本所領家下文、或以神社惣官宛文令相傳欵、雖為本所進止之職、無殊罪科者不可(被)改易之条、天福・寬元所被定置之也、然者安堵所職可勤仕本所年貢以下課役・關東御家人役之由可相觸之狀、依仰執達如件、

正應五年八月七日

右野尻士長善兵衛系図ノ中

平七郎
盛茂
女三人

嶋津庄薩摩方伊作庄預所安藝右衛門尉重宗代盛景法師

法名淨空與下司伊作平四郎則純法名法念西代孫有純相論條々、

一 下司職事

右對決之處如淨空申者、文治三年則純叔父重純寄進[◎]之

間被庄号畢、於下司者為領家進止之處、元久二年守護

人忠久稱関東御勘氣、追出重純、令知行下司職畢、為

領家依無違乱、至寶治之比、自然走過之處、惣地頭常

陸後家^{忠久}令押領之旨、有純書送種々狀於預所之間、

年來忠久知行者為押領之由、領家始被驚思食之處、有

純掠給御下知狀違背領家云々、如有純申者、則純幼少

之時為重純之沙汰、令寄進畢、重純給御下文押領之間、

元久之比重純與則純於関東被召使之^(決力)、則純給御下知歸

國之時、於門司関令入海之刻、正文紛失畢、承久三年

地頭忠久以當庄書生・檢非違所并自名田尻・和田・大

野三ヶ村萬雜事令相傳下司職之間、至嘉祿年中不相違

之處、忠久死去之後、常陸後家令押領畢、訴申事由之

時、可為能登前司光村沙汰之由、後家依載陳狀、光村

尋問子細、就出和與狀、則純寶治二年雖蒙御下知不違

背領家、元久以前者為領家進止之間、所申其由也云々、

爰如淨空所進重純文治三年三月寄進狀・同年四月十四

日廳宣・同十五日政所下文[◎]者、重純子孫可為下司郡司

之旨註之、如有純書送預所七月十九日・八月十六日・

五月廿日^{各不記年号}書狀者、伊作庄下司職數十年常陸後家押

領之間、▽[◎]為領家進止之由△有純訴申之時可參決之旨

被仰下之處、地頭[◎]出、避文云々、如檢注使加判建長元年十

一月解狀并有純進領家寶治二年訴狀者、依寄進奉公給

御下文可備向後證文云云、如此狀者▽[◎]領家△進止之由

所見也、如有純所進天永三年国司任符・治承元年廳宣・

元曆二年外題下文者、為則純相傳所帶歟、如同所進元

久二年十二月御下知・御教書案者、不帶正文之間、所

相貽不審也、如寶治二年四月十日御下知者、常陸後家

押領之由、有純訴申之間、付本職可令則純領掌云々、

如狀者雖有子細不帶補任本御下文、乍書與種々大望狀

於預所、以地頭濫妨停止之状令違背領家之条甚奸謀也、且召問常陸後家之處、領家進止之条不論申欵、然者可為領家進止焉、

以前條々、依將軍家仰、下知如件、

建長七年十二月廿五日

(北条時頼)
相模守平朝臣在御判
(北条重時)
陸奥守平朝臣在御判

一惣公文・田所兩職事

一公文・田所給田浮免事

一(管)下司管失事

一公文給田事

一七見崎并崎田兩坪二町事

一富永名事

一(管)芋事 一桑事

一預所日別雜事等事

一下司苟取領家下部等作田事

一未進事

一下司親類縁者未進事

一下司下人等盜取收納使代則吉作田否事

一百姓三十人内下司抑留七人由事

一惡口事

右十五箇條、下司職可為領家成敗之上、非沙汰之限矣、

201 他家文書写四十四通ノ中

201の1

あすはこふの云々、

写(但正文ハ正保四年五月廿五日江戸へ、
税所勝兵衛尉・兎玉作左衛門尉持參、

201の2

寄進

先祖相傳所◎領三ヶ所事

在管薩摩内伊作并日置北郷
同南郷外小野副進次第調度文書◎等

右、件所領田畠等者、年来嶋津御庄寄郡也、而天下騷

動之間、公私為軍地、人民百姓併逃散早、然間庄国兩

方課役、如何可◎令勤仕哉、於于今者、令寄進一圓御庄

御領、致安堵計早、有限於年貢所當物等者、為重純沙

汰、追年無懈怠可令連上京都之状▽◎如件△、但為後代

證文、於下司・郡司・惣公文職者、重澄以子々孫々、

不可[◎]相違旨、為被成下御下文、勤狀以解、[◎]勤
文治三年三月 日 平重澄判

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二二一四号文書卜同一文書ナルベシ」

202 十訓抄二 建長四年神無月書

丹後守保昌任國に下向の時、よさの山に白髮の武士一
騎あひたり、木のしたにすこしうちよりて笠をかたふ
けて立たちけるを、國司の郎従等いはく、此老翁なむ
に下馬せざるや、奇怪なり、おろすへしといふ、國司
いはく、一人當千の馬のたち様なり、たゝものにあら
すと制してうちすきける間、三町はかりゆきて、大や
の左衛門尉致經數多の従類を^④具してあひたり、弓取な
をし國司にゑしやくの間、致經云、こゝに老者や逢奉
候つらん、あれハ愚父平五太夫にて候、^{致頼也、}〔けむこ〕の^{近衛内ノ人}ある
中^{ナラン}人にて候、子細しられず、さためて無禮を現せし
め候はんかといひけり、致經すきて後、されハこそ致
頼にて有けり、此黨頼信・保昌・惟衡・致頼とて、世
に勝たる四人の兵なり、兩虎戦かふ時ハ^④死すと云こ
となし、保昌かれかふるまひをミしりてさらにあなつ

らす、郎等をいさめて無為なりければ、いミしき高名
なり、

203 下 嶋津庄日向方住人等

圖師職事

所詮云^④清法師留守奉行之時、建永元年九月日補兼秀已
來、至安貞二年成秀相傳知行訖、可為地頭成敗者、彼
廿三ヶ年之間、蓋致其沙汰哉、重直所申非其謂欵、仍
停止地頭之妨、任本知行之例、可為領家進止矣、

寛喜二年十一月 日

^{〔北条泰時〕}武藏守平朝臣御判
^{〔北条時房〕}相模守平朝臣御判

204

西國御家人者自右大將家御時守護人等注交名、大番以
下課役雖令催勤給関東御下文令領掌輩不幾、依為重代
之所帶、随便宜或給本家領家下知、或以寺社惣官下文
令相傳欵、而今就式目多違乱出来云々、是則承久兵乱
之後重代相傳之輩之中插奸心族、摸新地頭所務、奉蔑
如國司領家之由有其聞之間、為斷如然之狼啖、於本所

成敗事者、不能関東御口入之由被定早、就是何忽可及御家人佗僚哉、但為本所現奇怪蒙其咎者勿論可謂欵、然者訴訟出來之時、各觸申本所、可被注申罪科之有無於関東也、兼又自今以後者先被觸仰子細者可尋沙汰之由、面之可被申置也、抑雖假名於下職、其身非御家人之烈、守護人更不可催促大番役、若宛催其役者可為本所鬱訴之故也、存此旨可令致沙汰之状、依仰執達如件、

天福二年五月一日

駿河守殿

(北条泰時)
武藏守御判

(北条時房)
相模守御判

日向國御家人北郷五郎入道殺害間事、於池上三郎兵衛尉者、不知子細之由、雖載國正法師夜討結構張本白状為在國之間、依其嫌疑被流遣奥州早、其上不可免出入之由重加下知畢、次國正法師隱岐國、同子息等便宜國、如此所被配流也、可令存其旨之状如件、

仁治二年十月十七日

(北条重時)
相模守御判

御家人輩、依本所成敗職、致訴訟事、於本所遂對決、被裁許之時、有非勘者、就御家人愁、速可被執申子細、可被存其旨状、依仰執達如件、

寶治二年七月十九日

▽◎相模左近大夫將監殿△

(北条時頼)
左近將監御判
(北条重時)
相模守御判

兼久
号日承御館

※1
鳴津御庄開發留守
平大監季基孫智也、
知行鳴津院并北郷、
飢肥南郷、薩摩方
日置南郷弁濟使也、

兼則
号日大史

※2 知行北郷、鳴津院弁濟使職、
此外者女子之相傳也、

兼次
号日五大夫

北郷知行、西明寺建立、此時
ニ始有地頭、然間下作職ヲ知
行シ、名々ヲ讓与子孫ニ、

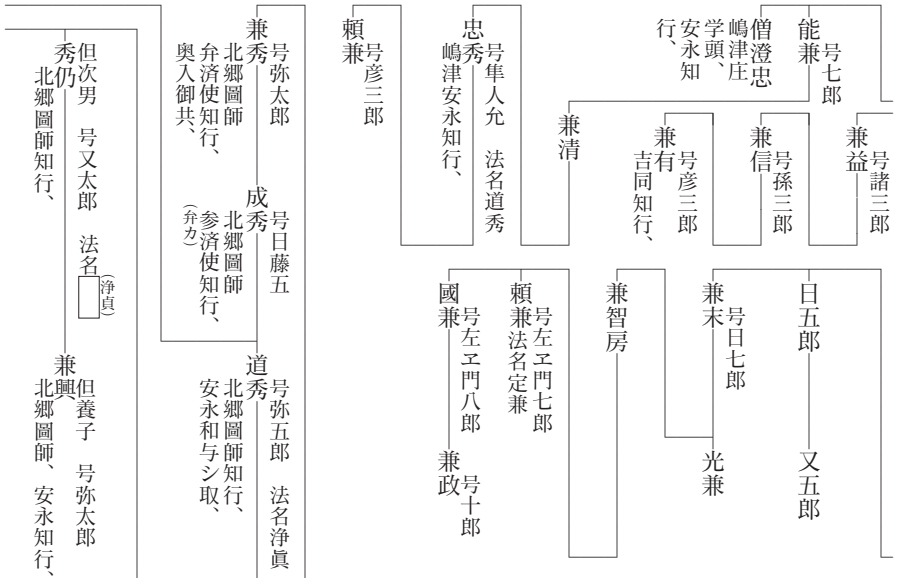
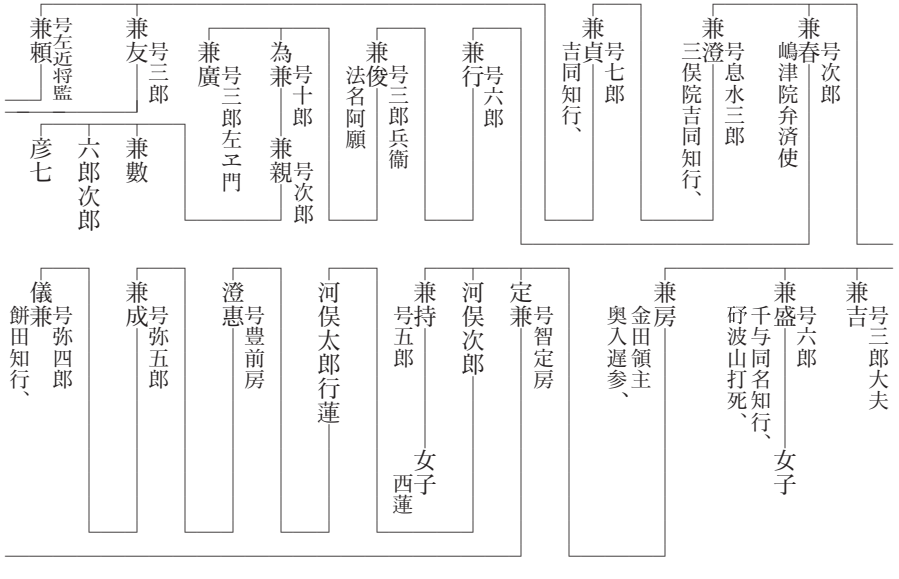
※3
兼宗
号日六郎大夫
鳴津院弁濟使

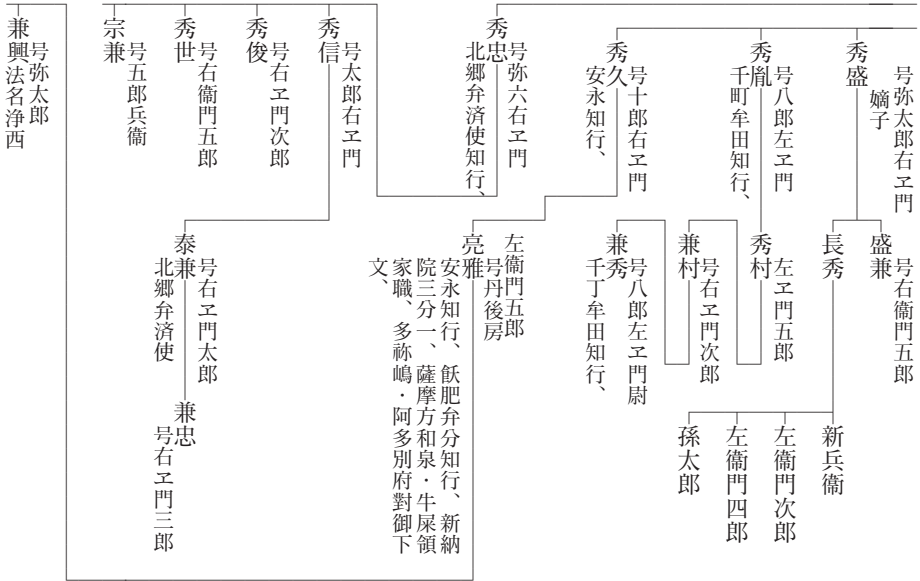
兼吉
号三郎大夫
法名法阿
鳴津院弁濟使

三侯院吉同知行、安
養寺建立、兼次次男、

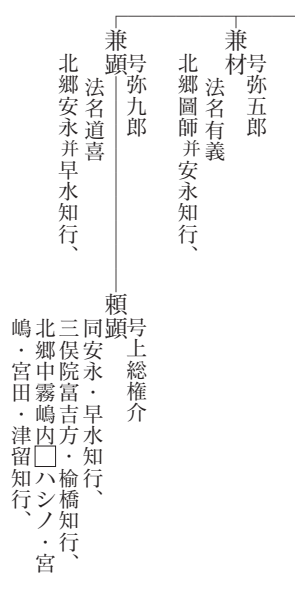
兼平
号太郎大夫

※4 北郷弁濟使職知行、





- ※1 (行間)
 - 「肝付古系圖、兼貞女子飢肥南郷郡司妻トアリ、兼久ノ妻ナラシ、兼貞ハ季基ノ智ニテ、其智ナレハ季基ノ孫智ニ疑ナシ」
 - 〔梅北家ノ古書ニ、于今梅北ノ内ニ女子分門ト申候ハ、梅北家女子ニ配分之知行之由申傳候トアリ〕
- ※2 (行間)
 - 〔右八櫛間郡司妻トアレハ尾張守是助妻ニテ、伴仲子コトナルベシ事ハ櫛間院本主手継系図ニアリ〕
- ※3 (行間)
 - 〔右八櫛間郡司妻トアレハ尾張守是助妻ニテ、伴仲子コトナルベシ事ハ櫛間院本主手継系図ニアリ〕
- ※4 (行間)
 - 〔娶肝付太郎兼俊女為妻、生弥太郎兼秀、而兼俊大監季基外孫也〕



大宰大監 貞元
同大監 季基

平五 兼輔 從五下
神崎平太郎 兼重

同二郎 季兼
隱岐守 良忠

了忍坊

孫 入道

一 阿弥陀 孫太郎

孫四郎

治部坊玄成

嶋津院西福寺ヲ請取、

若狹房重慶

早水ノ別當ヲ請取、

式部房權少僧都澄圓

讚岐房圓秀

肥後房兼秀

右正文在始良土野添掃部、

210 在鶴田土市来伊兵衛

可令早任親父右衛門尉友久讓狀、左兵衛尉惟宗友成為

薩摩國山田村領主職事、

右人、任承久二年正月友久給關東御下文并同年七月友

久讓狀等、友成無相違可為彼職之狀、依仰下知如件、

貞應二年九月廿九日

前陸奥守在御判 （北条義時）

一通御下知案略之、

211 一山内寺豪契申状 慶長廿年正月

一感應寺勸進奉加帳

野田吉滿善左エ門

一澄久半風軒 出家源甫
又七 遠江守

清久

忠弘若州五郎三郎
法名榮崇

一厚久摂津守 右馬頭
又次郎 宮二郎

山内寺

一託摩豊前守源治信申状

阿久根

一大石市左衛門 古文書專讓状也、

同在末田氏

一黒江九左衛門覚書 慶長三年
酉四月

在高尾野山鹿傳右エ門

一菊池系圖

高城田原氏

小田原彈正忠秀良 四十二才 久世殉死、

在高城土水引中宿久米市兵衛

一山門市来崎 古系圖

212の1

水引小倉浦人宇右エ門

嘉靖四十七年戊辰正月三日吉辰

煎硝唐人林一官字置

中文略ス、

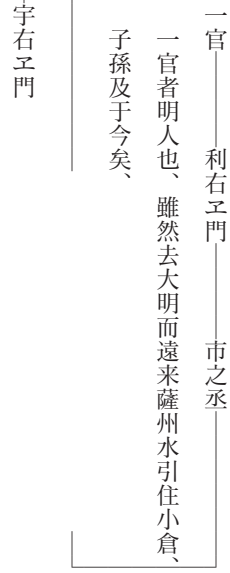
峇永祿十一年戊辰正月三日吉辰

右ノ馬厩之土ヲ取申、其土ニモ上中可有之、イカニモ能ク見分ケテ取り候、同イヤワラカナルヲ取り、其ノ上ノ塩氣有ヲ取り可用、其土ヲ手籠ニ入、如何ニモコエヲ除ケ、コエノカタラヌ様ニシテ其土八荷イ、夫レニ水五荷ヲ以テカケタレ候而其水如何ニモ澄イテ、其水ヲ釜ニ入レ半分ニ煎候、以上其水三釜ニ煎シツメテ、亦一釜ニ入レ合セル時、藥一文目入而煎候時ニ釜ノ端ニヒ付ク時、亦イカニモ清水三盃入テ煎シ、其ノ時分見別ケテ油ヲ立上ニウキアガル時、亦水二盃入レテ煎シ、油ヲ立ツ時取アケ而イセ候、アンシウ即チ是也、又秘藥古之ス、ケカヤヲ同前ニコシラエ申候、

又秘藥土屏イノ土ヲ同シ様ニコシラエ申候、
以上三種一様之事候、

212の2

近世系圖



213 在垂水肝付豹右エ門

一福崎弓五重元掾

214 在川上式部

下 武藏國多西郡内二宮神官百姓等

可令早以日奉直高為地主事
(職脱カ)

右直高与忠久對決之處、直高者元暦二年六月九日祖父
宗弘帶讓与嫡男弘直證文之上、弘直為地頭之條文文治
三年十二月十二日武藏前司入道所成下之國符顯然也、

忠久者治承五年十月十日宗弘帶讓賜久長之假名狀、而
此狀判形与直高所令帶之證文判形依違之間被尋類判之
處、直高之伯父小河二郎自宗弘之手所分得小河郷讓狀
之判形与分賜弘直之讓狀判形同事也、仍任文書道理以
直高所補任地主職也、神官百姓等宜承知不可違失、故
下、

215 全

建曆三年九月一日
遠江守源朝臣(花押)

やまとのゐんのうちかしのうら、かはのへの内みや
のむらのようさくふんきうふんとしてちきやうある
へき狀如件、

十一月廿三日よりひさ(花押)

216



217

廿八

十月十日
得宗弘讓
為地主職、

「日奉直高

小河二郎
得宗弘讓領小河郷、

忠久
建曆三年与直高争地主於武州多西郡、

古今要用之記 平田純正筆ト見ユ、

忠久 称親王云々、頼朝三男、号島津、
福宇征夷將軍、或判官、或大政大臣、

抑忠久為後白川院猶子一節備高倉宮蒙親王之宣旨、

先年於宇治平等院被討給フ似先高倉宮故也、頼朝三男、

母儀祇園御門三代ノ末惟宗卿比幾判官藤四郎義數娘也、

忠久十四歲赴奥州征伐之大將功畢、自鎌倉為西國下向

上洛参内之時也、忠久御下向之時、白川院九州諸侍

可用忠久被成宣旨、三寶祇殿為勅使先下向ス、九州諸

侍士戴宣旨、中國安藝国迄打迎ニ参リ、黒木御所造リ

雜賞シ御目ニ懸ル、敏參^トテ御目ニ懸ル故、敏參上下云

也、於若宮拜殿畠山重忠ヲ為烏帽子親元服之故為忠久、

始者念佛宗而道阿弥陀佛、後作禪宗法名得佛ト申ス、

弘安九年三月廿一日逝去、

全 新納殿

○一 忠久云々

押忒ニ有之、

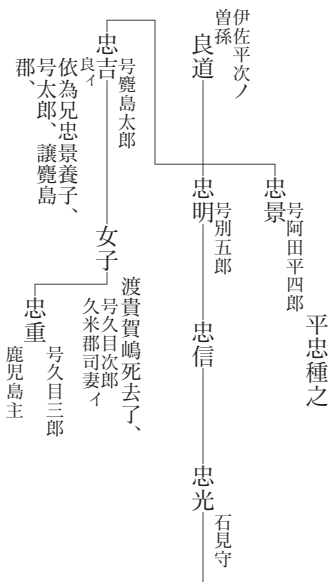
文治二年六月一日関東立上洛アリ、内裏ニ参籠申シテ

西国下向之由ヲ奏聞ス、然ハ不空征夷將軍ト示給フ、

騎馬三十騎打セ下着ス、御年十八、

218、出水士須田利兵衛本

系圖



219 出水谷山氏本文永五霜五月三日平忠能書留置、
出水志賀氏

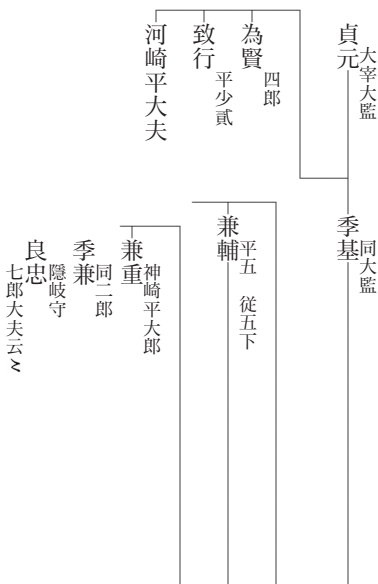
一志賀播广守源親置御奉公状 慶長十三年

二月吉日

出水宇田氏

一字多能登入道訴書

220 出水氏華木彦兵衛本



221 出水福崎伊兵衛

一福崎伊与御奉公書留

慶長十七年 正月

222

如折昏状者、非無其理欵、前之^⑤地頭代之^⑥無致沙汰、
敢任道理令免除了、

地頭所坐判^⑦

僧智惠謹言

南郷内門貫山寺蘭壹所為郷地頭殿被押召難堪愁状

件条、彼蘭者寺僧之領^⑧、年序既積矣、所以御庄建立

主平大監季基朝臣之御子息平五大夫兼輔朝臣之時、從大

宰府奉呼越竹林房給^⑨、所渡與給蘭也、仍竹林房墓所眼

前也、其後彼入室之弟子講衆成覺房快禪大德八十六年之

間居住、其墓所眼前也、其後又講衆成鏡房兼禪大德請次

四十二年、彼人死後二八、又講衆快賢香禪房之所領也、

快賢大德之墓所也、又以顯然也、其子息比丘尼妙法相傳、

彼時件蘭依有隙、藤先生正弘借文ヲ込テ暫居住、借文明

鏡也、雖然其後返早、比丘尼妙法如元居住^⑩、其子息

比丘尼相傳^⑪、自其手僧智惠令相傳^⑫、常樂寺御

祈禱勤仕之間、宿房ニ定矣、爰以藤先生正弘本主ニ返与

之後、右衛門殿・大輔殿・藏人入道殿・笠次郎殿代々地

頭所之御時、全以無其妨、然當御時被押領之条、難堪之

致、何事如之乎、仍蒙裁許、御祈禱之間、宿房卜定之、

欲致 本家・領家 大將軍家・地頭家御祈禱之丁寧、録
狀言上、以解、

建曆三年四月日

僧智惠上

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二九号文書ト同一文書ナルベシ)

223 在辨官新右衛門

(花押)

薩摩國住人大平基光并舍弟後平二元能企參上、入見參
所令歸國也、^(◎可被)〔早々〕存其旨給者、仰旨如此、悉之、

五月三日

盛時奉

伊豆藤内殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二七の2号文書ト同一文書ナルベシ)

文治三年 右大將源頼朝之御判也、前ニ在薩摩國牛屎院司太

秦元光之代御下文也、

224 小林土羽嶋主馬

一市来氏家上洛時日記

元弘三年二月十八日・康永四年三月
十八日・貞治二年五月三日

御鞠之事

同坂元氏

一坂本清左衛門通信覺書 正保二酉八月十五日

右同

一伊勢貞昌申狀 寛永十七年
二月五日

小林ノ森岡氏

一豊後衆契約条書

小林ノ押川氏

一押川内藏丞近長覺書 貞昌与力

小林ノ大脇氏

一大脇弥五右衛門利為覺書

225

一倉岡土庄内高城居住黒葛原五左之門

御文書 同系圖

頼朝 右近家大將

第三
此戊子
(マヰ)

頼家 左衛門督 第一

御母遠江守時正御娘也、

實朝 右大將征夷將軍 第二

島津判官下号、御歳十八
忠久將軍

白河法王御時、院宣ニテ高倉院ヨリ西国之征夷將
軍卜定メ玉フ、御幕文ハ圓相之内ニ十文字ナリ、
口傳ニアリ、

御母上ハ丹後ノツホネト申ナリ、比企藤四郎判官

御娘ニテ、マス惟宗卿御娘トモ申ナリ、

承久二季六月日、惟宗氏被改畢、

忠久ノ妹婿 近衛殿御姫也、

右通ニテ、伊集院ノ絶筆ハ為久マテ也、

226 小林士

一 八重尾土佐介覚書 寛永十三年
三月十五日

全

一 柚木崎丹後守正家 元龜三五月四日
三十四トアリ、

高岡

一 善哉房日記 自天正十年中秋至同
十一年四月廿八日、

227

延慶二年三月於鎌倉写之、

横山遠江守良久

本名字ハ横山ナリ、立山ト名ノルコト越中ノ国ケイ
ノ郡三千二百町知行申候云々、

小野氏系圖 良家 良實

小野小町

如本

野三大夫

治承四年阿波国麻垣地頭
東鑑、建久三年四月十一日、若公七才、
常陸入乳母事、被仰野三刑部丞成綱云々、
道姉

成綱

成任

中條藤左エ門

成尋

義勝法橋

家長

東鑑ニアリ、

右大將家

御乳母

近衛局

※

女子

經兼 横山太夫

八田權守妻 宇都宮左衛門尉知

綱・筑後守宗綱母、
知家ト下カ

八幡殿奥州セメサ

文治四年九月、信濃守遠元女仕
于二品、始号大貳局

七絳兼先陣云々、

※ (行間)

「東鑑、建久三年十二月五日、御堂供養、將軍家自奉懷新誕若

公出御、給盃酒、女房大貳局近衛局取杓持盃云々

八田宇都宮等系圖

関白道兼男權中納言兼隆之男

兼房

兼仲

相模守 左少将 應徳二年五月二十日卒、四十九

母源高雅女

宗綱

号八田 備後 下野守

從五位下

兼仲依無子、弟宗圓子為猶子

兼禪

阿闍梨

母治部卿經季女

靜範 配流讃岐国、

山 圓範 法性寺座主

宗圓

宇都宮座主

宗綱

号座主三郎

八田權頭 始為叔父兼仲嗣子、後生男宗房、即為兼仲後、而歸宇都宮、

朝綱

三郎 左三門 武者所 号八田

後鳥羽院北面

宇都宮檢校 依伊勢訴配流土佐、

知家

四郎 左三門 筑前守 右馬允

号八田 又小田 源義朝男

自此出于武家系圖

右大系圖ノ抄

女

右大将頼朝卿乳母 小山下野大掾政光妻 小山七郎朝光母

祢寢院志々女弁濟使系圖

宗義

藤大夫

中郷弁濟使

義俊 号藤二郎大夫 次大夫イ

義兼 号藤四郎大夫

清宗 号藤六大夫 法名觀勢

義良

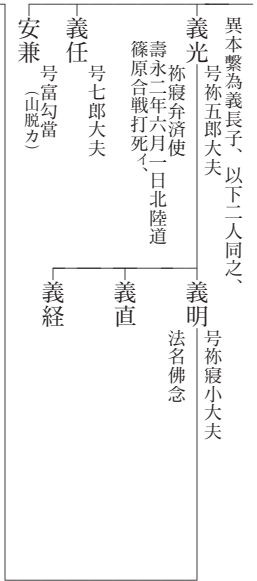
号富山二郎大夫 法名西行

義行

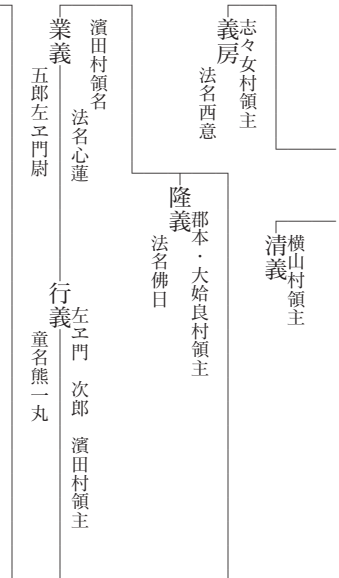
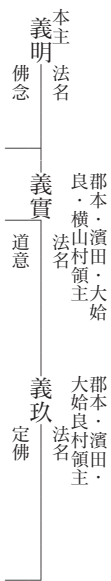
号三郎大夫 法名行念

義忠

号四郎大夫 長谷イ 飲肥南郷郡司イ



大祢寢院弁濟使職相傳次第



(如解力) 用状者、弁濟使職之相傳三代之 欠 當時知行之間、御庄内去年大略有 (加) 作之訴、而當村弁濟使獨抽勸 (農) 之忠、有間益之由風聞之間、御目代殿 (公) 八中先生加相尽檢注之處、加作を以 十餘丁許欵、難可有抽賞、不知念子細、自上被改易弁濟使職畢、雖恐意、依難弁相傳譜代事欵、但於所當米无懈怠可令進濟、仍於弁濟使以任 (職者) 相傳之文書理、無他妨可令領掌之状如件、

下司代散位平 (花押)

(勾) 當僧安兼解 申請下司殿御裁事

(請被力)

殊且任相傳所帶文書理、且依奉公公益覺、(実力)如元裁

補百引村弁濟使職事進相傳次第文書等

件弁濟使職者、任相傳文書之理、補任奉行、(以來)本無相違

矣、爰去年不慮之外為傍以御補、所作田畠濟被刈取

所從眷屬皆悉逃出了、難堪之甚何事如之哉、且注文進

(上之方)

抑重案事情、縦進上御房令預如法結所當物、於

弁濟使職者、任普代族不可相違事欵、而ヲ參洛御庄官

成競望、既(繁力)繫之糸、亡損之至不可勝計矣、望請早(道力)

理、如元賜件弁濟使職、於所當物者無懈怠、(可令)運上、

言上如件、以解、

文治二年正月 日

勾當 (簡安兼)

232 大野正右本

忠久 豊後守 嶋津判官
法名徳佛

十八サイノ時、文治二年六月一日關東立上洛有、内

裏ニ參籠申、西國下向由ヲ奏聞ス、不空征夷將軍卜

示給、騎馬三十騎打七下着、

233 新納喜右本

五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七
桓武 淳和 仁明 文徳 清和 陽成

源氏 二代 三代 四代 五代 六代 三代
貞純 經基 滿中 頼信 頼義 義家

七代 四 八代 五 九代 六 十代 十一代 十二代 七
義親 為義 義朝 義平 朝長 頼朝

234 都城志和地氏本

六十八代 六十九
忠久 嶋津義祖 忠義

一文治二年六月朔日關東ヲ立上洛、過數日京ニ着、有大

裏ニ參内、西國下向之由奏聞ス、然者征西將軍卜成給

騎馬三十騎ウタセ下向ス、生年十八、御母丹後御局、

御分國七ヶ國、此内越前・信濃・伊勢・若狹之事者

近衛殿御領ナリシヲ御給候也、日向・大隅・薩摩以上

七ヶ國也、藤家ニ成給事ハ越・信・伊・若ヲ御相續タ

ル故欵、委細別紙ニアリ、

235

得佛 又三郎 嶋津始此時代、
忠久

忠久將軍 嶋津判官卜号、御歳十八

白河法王御時、院宣ニテ

高倉院ヨリ西國之征夷將軍ト定メ玉フ、御幕文ハ

圓相之内ニ十文字ナリ、口傳ニアリ、御母上ハ丹後

ノツホネト申ナリ、比企藤四郎判官御娘ニテ、マス

惟宗卿御娘トモ申ナリ、承久二季六月日、惟宗氏被

改畢、忠久ノ妹婿 近衛殿御姫也、

寛永十八年 將軍家光公御代、諸家之系圖文書可有

上覽与被 仰出、光久公御在國之刻同年九月申來り

候時御内談之目錄、

嶋津彈正久慶書之、

239 在須田□郎左衛門

△鎌田者鎌足之王子之孫也云々、

筑紫江下向之事者、近衛殿下向之時御供申致下向、其

時於庄内梅北近衛殿神柱ヲ勸請アルニ、日本二柱ノ神

ト勸請アル、時岩河七十五町ヲ給也、又御供申上洛仕

候、其後嶋津殿御下向之時案内者罷下、其時横河七十

五町ヲ給也、皆々鎌田本領也、

237

起程

上香使

缺掌

處置

権三島砂糖

奸關

238

一國分より御相續之御繼圖ニハ 忠久公称親王云々、福

宇征夷將軍、或判官、或大政大臣と御座候、證文見合

申度候事、付繪旨可有之候哉之事、

此間略ス、

一 忠久公頼朝公之御直子たる事記録ニ者見へ不申候得共、

古之御繼圖ニハ慥ニ御座候、古之御繼圖を被差出、む

かしより此分ニ家傳候と計も可被仰上哉之事、

(表紙)



備忘録抄下

240 敏達帝十二年冬百濟日羅說謁拜豐聰王子

十二年百濟日羅來、初日羅名于國、帝遣紀押勝召羅、

押勝自百濟歸奏曰、百濟王愛羅、於是乎、復使吉備羽

嶋召羅于王、王懼以羅從羽島來、王子偷眼於羅、羅指

王子曰、神人也、具在太子事中、

聖德太子者用明帝第一子也云々、初敏達十二年、百濟

日羅來、身放光神異不測、太子微服、從諸童子入館見之、羅指太子曰、是神人也、太子走去易衣而出、羅再拜跪地、敬禮救世觀世音、傳燈東方粟散國、太子從容而謝之、羅放光、太子亦眉間出光、

241 坊津一乘院

寶物案内記下 快寶私記

242 一稻荷大明神印言寫一紙

忠久公御夢想ニ授リ玉フ印真言寫也、

243 得能通昭雜録ノ抄

田中國明

志賀登龍

日州高岡産、受學國明、

得能通昭

244 猶々尔來御床敷存候、又五郎殿傳申度候、以上、

三月三日之芳札一昨日相届令披見候、如來意其後久絶音問候、然者壹冊御書調ちらと一見申候、清和天皇ヨリ頼朝迄諸流之次第大系図にも有之候上ハ玆敷義にても無之候、御家御一分之系図とハ他家ヨリ見候てハ不被存候、併諸流之わかれ御見合之ためニ残シ被置候義ハ、諸流内證之系圖ニ加様之例も可有之候間、其段ハ是非不被申候、

一 忠久ヲ頼家・實朝ヨリ前ニ御つり候義、御家傳ニ被任候上ハ是非不被申候得共、外見御遠慮も可有之義と存候、

一 尊氏家代メヲハ足利之先祖にて御つりとめ、新田にても義貞之先祖にて御つりとめ、徳川之御流計 當御代迄詳ニ御のせ候義、定而各別之御崇敬之御心底とハ存候へ共、此諸家之内へ混雜殊ニ下段ニ御のせ候義、拙者など一見も無勿躰候、それゆへ早々返進仕候、右之噂他言仕聞敷候、必々拙者方へ御見せ候とも御沙汰有間敷候、御家ニ残シ被置候とも、義季公迄にて御つりとめ、徳川之御先祖とわき付被遊可然存候、
一 旧好之御事ニ候へハ、此内誤も正シ、文字ヲモ改進度

候へとも、唯一人有之に弟ニはなれ候て何事も無十方躰ニ候間、重而被下候義御無用ニ候、右之仕合故何方へも疎略申事ニ候、恐々謹言、

六月廿二日

(林鶯筆)
春齋法眼
春(花押)

鳴津圖書様

御報

245 亥 市來千左衛門家重本

目安

市來筑前守忠家謹申、

欲早任守護人鳴津大夫判官入道預狀之旨、下賜御教書、弥抽戰功、薩摩國宮里郡司孫九郎義正同一族等跡地頭職事、

副進守護人預狀

右所者亡父備後守氏家依抽戰功所被預置也、忠家又被相續忠節之間、去年鳴津修理亮參上之時、差進代官有河兵衛尉訖、今親類左近大夫家連令在陣者也、然者早任守護人預狀旨、下賜御教書、弥為致忠節、目安言上如件、

應安七年十一月 日

246 在伊地知郷兵衛

此書立之城之即令下城之、上使衆任存分(御)いるへき事
肝要候、仍如斯、

九月廿九日

竜伯(花押)

所之城中

さつま

鹿兒 永吉 日置 百次 宮里 山崎 比志嶋

川田 東侯 郡山 藺牟田

川邊 川邊

高城 ミヤ 山田 高橋

(本文書ハ「旧記雜録附録」二五二号文書ト同一文書ナルヘシ)

247 就渡唐船之儀、先度委曲令申候、弥預入魂候者可為本

望候、猶桂樹院可有演説候、恐之謹言、

閏六月十七日

(細川)
高國

嶋津豊後守殿

(本文書ハ「旧記雜録附録」二二七号文書ト同一文書ナルヘシ)

248 在垂水町田六郎右衛門

一文明記 天文五年卯月上旬
書写之、忠堯

岩崎

一廿三番箱 天草城乘帳等入

寛文三御旗本

一水野藤右衛門元吉

249

ワレタル鞍チキリ入ル夏、
右此チキリノ入様モ伊勢殿殊外秘事云々、

(島津)
義虎

本田信濃守殿

参

250

玄 飢兵部左エ門武清コト也、
一牧庵宗誉家訓 元和二年仲夏、年七十九、題ハ勤究條
之事トアリ、平山内匠允殿ト宛タリ、

一同覚書 同年仲夏朔日

251 在五左

宗治 那須小太郎 右馬允
与市宗高ノ子

文治二年丙午六月、島津忠久判官発駕関東、薩广国

依下着、宗治當国之蒙仰政道、同元年巳九月、先陣
ニ罷下、其後日州臼杵郡住居畢、

此年貴久覺島ニテ越年、如前々ノ伊地知・本田出頭、
忠久下向自建久七年丙辰至乙巳凡三百五十年欵、

252 河野玄蕃通親女市来和泉守妻ス、

貞清二子

時盛

主水佐 天正四丙子生、

戊申 天文十七年

六月廿八日、大風雨洪水、阿多・田布施ノ間ノ大橋落、
閏七月廿一日大風雨、同廿八日、申ノ剋ヨリ酉ノ末マ
テ大風、寺社少々吹摧、

寛永九壬申六月廿四日卒、

254 甲辰 天文十三年

四月廿二日大地震、

乙巳 天文十四年

此年三月大地震、時之内三度、又嶋津次郎三郎・北郷

讚岐守同心ニテ伊集院へ参上ノ支、三月、在所ヲ立ツ、

同十三日、貴久ヲ奉仰守護、正月廿六日、伊東出張シ

テ飢肥東ノ内水之谷ヲ陣ニ取、同二月十四日、鬼カ城

ヲ向陣ニ取構、同廿四日、伊東又出張シテ本城麓発向、

彼鬼カ城廿六日ニ開陣ト云々、

丙午 天文十五年

己酉 同十八年

三月十一日、伊集院大和守飢肥エ打越、同卯月三日、
ゴウマイガ辻ヲ切取、七ヶ所ノ陣敗北ス、同十日、大
和守帰陣、五月十九日、自屋形方黒河崎エ着陣、六月
朔日、敵方着向陣、同十一月廿四日敵陣焼失、極月十
一日、渋谷衆降参、和平解陣、

切取、同十二日、清水本城渡、

護ノ日當山ヲ打落、平良尾張打死、九月三日、姫城ヲ

二番、五月廿四日、清水新城奔籠、八月晦日、北原格

自二月上旬乱起、本田紀伊守父子崩落、三月廿四日、
北原衆奔籠日當山、同廿六日、伊集院大和守打越笑隈

同日、

庚戌 同十九年

丁未 天文十六年

此年貴久覺島ニ遷、

辛亥 同二十年

八月十五夜大風吹、福昌寺客殿・諏訪拜殿・御内之寢

殿吹崩、

壬子 同廿一年

大飢饉、去年亥ノ歳秋作違ニ依テ今年夏人民多死、同

秋ヨリ世間ユタカナリ、

癸丑 同廿二年 春已来大旱(豊力) 世間依所ニ悪、

甲寅 同廿三年 自夏初蒲生与加治木隔心、八月中旬、

良重帖佐へ打越、加治木口エ手形出、九月中旬ノ比、

岩鋤エ自屋形方陣三ヶ所被着、同月末合戦(脱力)、良重之

人衆多々打死、同十月二日、西保武藏ヲ始蒲生衆多々

打死、其夜岩鋤崩落、

乙卯 同廿四年 三月廿七日、守護之人衆帖佐麓ニテ合

戦、高尾迄責上、同四月二日ノ夜、帖佐山田捨テ退、

翌日ヨリ守護格護、同七月廿五日、渋谷・蒲生ノ衆帖

佐エ衆使、切負テ東郷將監・白濱ヲ始東郷衆數多打死、

丙辰 弘治元 此年十月十九日、松坂ヲ被責落、祁・蒲

ノ人衆百人計打死、守護方ニ兩人打死、一人ハ已下ノ

者、同霜月廿五日、自守護方蒲生之内七曲ノ陣被取、

又極月五日、馬立ヲ陣ニ取、同月中旬ノ比菱刈為蒲生与

力、北村堺ニ向陣ヲ取、

丁巳 同二年 四月十五日、自守護方北村エ衆使アリ、

同日菱刈陣被責崩、菱刈權守ヲ始祁答宮院・眞幸・東郷・

蒲生ノ人衆四百餘人打死、同十九日蒲生城渡、蒲生方

祁エ還、

戊午 永祿(元脱力)

己未 同二年

庚申 同三年 隅州正八幡御迁宮、極月十一日貴久御代、

辛酉 同四年 此年五月十四日、肝付廻ヲ忍落、六月廿

七日、自守護方大牟礼・馬立・竹原山三ヶ所ニ陣取、

七月十二日、肝付攻破竹原山、忠将打死、同時七十余

人奉公、十一月七日、代賢福昌入院、

壬戌 同五年 此年三月四日ヨリ於福昌寺為國家太平有(権力)

一萬部法華經、焼香代賢、相那貴久、五月十八日、飢

肥之克悉ク伊東ニ渡、忠親(権力)榊間エ退、同九月十八夜、

豊後守内ノ者共心ヲ合切返入部、同六月三日、貴久以

發足横川切落、北原新介・伊勢ヲ始メ人衆多々打死、

此年義久栗野ニテ越年、

癸亥 同六年二月十日、以守護之人衆三山ニ衆使アリ、

ボウカリヤ破テ得勝利ヲ、敵数多被打、新藤殿(進)下向、

甲子 同七年 此年貴久号陸奥守、義久任修理大夫、

乙丑 同八年 五月十九日、義照公房様御生害、松永奔

走、隅州吉田若宮乘神名帳、任正一位、檀那貴久、

丙寅 同九年 二月彼岸、先公房様當一周忌貴久落髮、

号伯圀齋、三月、福昌開山眞前作花(花力)ニ、荷開クコト数

枝、花ハ櫻也、十月廿六日、自守護方三山エ衆使、城

悉焼拂、城ハ不落、

丁卯 同十年 霜月七日ノ夜、福昌寺直歲寮計焼、同廿

四日、伯圀齋・義久有發足、攻落菱刈馬越、翌日、本

城ヲ始メ八ヶ所捨去ル、横川ハ儀ニ成テ五六日シテ渡、

戊辰 同十一年 六月八日、伊東エ飢肥渡、福島肝付へ

渡、泰心都城へ退、極月十三日、島津日新逝去、法名

常潤、道号梅岳、年七十七、先公房様御舎弟一乘院御

入洛、尾張織田彈正忠馳走、

己巳 同十二年 此年五月六日、羽月・大口ノ堺於戸上

尾軍戰、屋形衆切勝、敵百六人打取、自初秋比守護・

相良和平ノ相談アリ、九月十日、互ニ人質ヲ取替也、

先自相良東帶刀・深見太郎左衛門尉出、自守護方鎌田

刑部左衛門尉・本田新介被出、同九月十八日戊子巳ノ

時、大口城エ兩殿打入、太平吐氣有之、役者鎌田尾張

守、

庚午 元龜元年 此年正月濫谷降參、川内郡義久知行、

今度依忠節高城・水引河向義虎へ被宛行、

辛未 同二年 六月廿三日、伯圀齋逝去、法名良等、道

號大中、号南林寺殿、十一月廿日、伊東兵船ヲ下、肝

付・伊地知・禰寢取合百餘艘覽島ノ奥へ漕泛、無何支、

飯ニ隅州ニタキガ水ニ倚、平田新三郎ヲ始メ帖佐衆五

十計籠戰、敵切負退、

壬申 同三年正月十九日、肝付ヨリ兵船倚來、隅州小村

ニテ敵船一艘切取、岸良將監ヲ始メ人數廿許打取、同

十八日、飯野・三ノ山境ニテ敵八人打取、二月廿日、

廻・市成境ニ自守護方野伏ヲ出、肝付越後ヲ始メ廿人

計打取、同廿九日又衆ヲ出、境・二河被破、

癸酉 天正元年 七月廿八日改元、六月十九日、一乘公

房為信長被追落京都、逃宇治卷嶋(橋)、其亦落給フ、九月

廿四日、垂水・牛祢ノ間早崎ニ着陣、義久御座、此ノ

手合ニ被攻落小濱椿、根占重武離組中ヲ出砌、於横尾

合戦、敵打五十余人、極月十三日、平小場ニ着陣、伊

東・肝付談合根占ニ成動、合戦討敵百餘人、

甲戌 同二年 此年正月、霧嶋ノ神火動天地、正月三日、

茶苑力平ニ着陣、同十九日、牛祢ノ城成儀渡ル、

乙亥 同三年

丙子 同四年 此年近衛殿三月廿九日御下向、六月廿六

日御立有、御宿寶持(院脱之)八月十九日、取日州高原陣、同

廿一日城渡、同廿二日、小林城ニ掛火落往、小椿共ニ

以上城数八拾去也、同廿三日、太守御發向城祝云々、

四月十八十九日、自小坂焼住吉天王寺、一向宗齊下(雜賢)ノ

孫一奔走、即被打、

丁丑 同五年

戊寅 同六年

己卯 同七年 豊後宗林・同新太郎殿日向州高城ニ推寄

陣取数万騎、同霜月十二日義久陣破、數万人不残打取、

庚辰 同八年

辛巳 同九年

壬午 同十年

癸未 同十一年 花舜廿五年忌、霜月十九日、妙谷寺地

引、

甲申 同十二年 二月十五日代賢先化、天海新住、

乙酉 同十三年

丙戌 同十四年 七月、義久肥後入、筑前・筑後・肥前

所咸、筑紫城落、岩屋落城、同九月豊後入、

丁亥 同十五年 関白三ヶ國ニ下向、河内太平寺陣所、

日州高城美濃守數万人推寄打柵(柵)、義久川内太平寺参上、

從其和平、義久御料人同心上洛、

戊子 同十六年 十月義久下向、播磨州一萬斛之在所御

承下向、

己丑 同十七年 九月義久上洛、妙谷寺地引、雪月廿八

日九日大雪也、

庚寅 同十八年

辛卯 同十九年 博多陣取、

壬辰 文祿元年 正月十二日大地震動、細河殿下向、三

月廿八日、又一様高麗立、七月十八日、金吾於滝水死

ス、

癸巳 同二年 九月八日、於高麗又一様病死、

或記三月五日トアリ、

甲午 同三年 三月義久上洛、御家門坊津ニ下向、同十

月京衆下向、三ヶ国竿打、

乙未 同四年 十月義久下向、濱市ニ家移、同雪月武庫

上洛、

丙申 慶長元年 京小坂七震動、家毛崩、人毛數万人死、

(月脱之)

七月六日、御家門帰洛、從志布志出船、

丁酉 同二年義久上洛、

戊戌 同三年 関白死去、此年於高麗又八父子江南人数

萬人打取、為其忠節加治木・出水兩所安堵、

己亥 同四年三月十四日義久下向、同九日、於卧見伊集

院幸侃又八様手打、

庚子 同五年

辛丑 同六年

壬寅 同七年

癸卯 同八年

忠昭一

久正二

忠長一

三

倉岡実石氏

一丹生備前守信房 慶二十ノ十五日

倉岡権屋氏

一丹生新三郎信秀 慶十五閏二月

一遠矢下總入道申状 慶長廿年 三月十一日

末吉貴嶋氏系図

仲綱伊豆守

兼總 大夫判官 賴茂 左馬權頭

賴兼 藏人

文治三年、下向于出雲国住宅于杵島郷、由是始号

貴島、

賴忠 若狹守 法名道阿

255 野尻權□氏

一三町肝煎分三石八升 慶五ノ八月六日

建久七年、忠久公供奉下向日州、

安樂備前守申状 三月十日

村田肥前守經房

肥前守經安

女子

太守立久公簾中

明應元年壬子五月十三日卒、道號椿庭性壽宣徳院、

出水

一志賀播磨親置上書 慶長十三年

256 一丑八月廿五日、豎山武兵衛ヨリ和蘭国通商御免ノ折疏

球朝鮮通信ノ国ニモ異国ヨリ違変等ノコト忠告スヘキ

誓書ノ上ニ許サレシトノ説承問アリ、九月三日、糺タ

ル一件ノ一冊丁廿余武兵衛ニ呈之、此日山田壮右衛門御

取次ニテ、御家吾妻鏡ト板本ト校訂ノ事奉伺通ニシ

テ原本ノマ、ニシテ分註ノ筋被仰付候、

一九月六日、参考太平記四十一本山田氏ヨリ被相下ケ拜

見之筈候事、

一久安譜補艸、去秋之頃早川務殿へ取次出し置候処、内

分ニ而子孫へ遺事苦か間敷旨ニテ、甲寅正月十日、於

御膳番座被相下ケ持下候時分、嶋津藤馬殿へ出合、成

行を以内分相渡置也、

257

一 小西作右衛門□次

慶長八年
児嶋文書

在鶴田土村田權左エ門

一 菊池武朝申状

弘和四年七月日
肥後守

在恒吉遠矢氏

一 遠矢下總入道申状

末吉

慶長廿年
三月十一日

一 安樂備前守申状

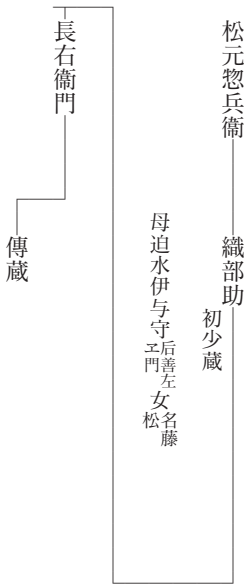
三月十日
栗野土本山市左エ門
延文ノ比ヨリ文龜頃迄ノコト、

一 秩父古系圖

日當山市来氏
一 惟宗古系圖 天正廿霜月十八日玄蕃允家房

高山宮里仲右エ門

讓渡所領貳箇所事



一長田石見入道梅林 文三年卯月二日水口ノ内荒田名ノ水田一段

證文宮掃部助宛

在垂水臣樺山吉兵衛

一樺山家小濱城落去事 明厂二年二月伊集院秀庵久貫寫置、

元禄六丑十一月廿六日日帳

一諸外城より出候文書等惣員數九千八百四十五通、寄筆

者写方六人、

全

壓槽ノ間

一木定規 長一尺三寸、廣一寸二部、厚五部、

全十年日キ

一史局十二月廿五日迄、正月五日出座、

全十五

松元惣兵衛

織部助

初少藏

母迫水伊与守
后善左女松
エ門

一所相模國大井庄内吉田嶋

一所薩摩國阿多郡北方

右、相具調度文書、所讓渡向女房實也、不可有他妨之状

如件、

文永三年六月十日

二階堂行久
沙弥行日

(花押)

(本文書ハ、「田記雜錄前編一」六八九号文書ト同一文書ナルベシ)

259

讓渡 領地并倉等事

一所在西御門入奥地

一所濱倉半分

右、相副證文、所讓渡向女房也云々、

文永三年六月十日

二階堂行久
沙弥行日

(花押)

(本文書ハ、「田記雜錄前編一」六九〇号文書ノ抄ナルベシ)

260

左兵衛尉藤原行久 東大寺功

元亨元年十二月廿九日

(本文書ハ、「田記雜錄前編一」六九一号文書ト同一文書ナルベシ)

261

可早以藤原氏行久法師二女領知相模國大井庄内吉田嶋・薩摩國
阿多北方等地頭職事

右、任亡父前常陸介行久法師名去年六月十日讓狀、可
令領掌之狀、依仰下知如件、

文永四年四月廿四日

(北条時宗)
相模守平朝臣

(北条政村)
左京權大夫平朝臣

(本文書ハ「旧記雜録前編」一六九六号文書ト同一文書ナルヘシ)

262

采謁 授旨 採實 掇迹 裨其所 未闕 研磨 獵涉

之家所傳聞異辞 吻筆 既得協 明旨蒙 淨寫命 所可

参互 互論瑜瑕 有所指駁 錯節衍語未 易通解 傳語

之所遺者窮搜而博訪 不知轍所望還其背馳

263

口上覺

例年十二月十三日於 御殿執行被仰付候疏銘御祈禱之

由緒御用被仰渡趣承知仕、ヶ条書之通左申上候、

一疏銘与書付候儀何様之儀ニ候哉、疏者疏抄之儀ニ而、

御祈禱疏ニ而御座候、

一御祈禱者何様之趣意ニ者致候哉、又者時分ニ銘も祈禱

も相替儀茂有之候哉、旨趣も銘も相替儀も御座候得共、

當分十二月十三日於 御殿執行被仰付候疏銘御祈禱之

儀者、佛菩薩之尊号、日本國中大小之神祇、諸天部之

名号、不殘書記シ、

今上皇帝聖躬萬歲、干戈不起、次國君御武運長久、萬

民康樂、專祈申事に御座候、銘之内本寺大檀那卜書候

所ニ 太守様御支干、又保祐檀卜書候所ニ御實名、於

御殿御書入有之、御祈禱被仰付候、左候而、右之銘於

寺正月朔日より七日之間於 正八幡宮御本地堂三時勤

行、十五日大般若轉讀、十八日懺法執行、御札守式枚

正宮社内ニ納置、正五九月二月霜月初卯日於正八幡神

前御武運長久之御祈禱申上候、

一何年間 誰様御代より當分之通於 御殿執行被仰付候

哉、又已前ニ者於寺致執行候儀茂有之候哉、右之趣委

細可申出旨被仰渡候得共、誰様御代より只今之通致

來候儀相知不申候段先達而申上置候、段々糺方仕候処、

往古より之書付等相見得不申候、寛永年間 寛陽院様

※ 御代之銘、夫より 御代々様之銘有之候、當寺之儀

尊氏將軍家義輝公より十刹之地ニ定被為置候寺格ニ而、

疏銘御祈禱之儀 尊氏將軍之時代より始り候故五山十

刹ニ限り候由、本寺建仁寺參晦和尚より承申候、本寺

二者 尊氏將軍家より代々之銘写六冊程有之、其内ニ

延徳三年二月廿二日將軍義植公、文龜二年十一月廿日

將軍義澄公、天正六年八月六日將軍義昭公、右之銘者

帝王様御病悩又者御産月二者別ニ出來申候故、趣意茂

銘茂相替申儀ニ御座候、左候而、年中之御祈禱只今於

御殿執行被仰付候通ニ御座候、銘之内將軍自身ニ書調

被遊御祈禱被仰付候も有之、住持江書調被仰付候茂有

之候、

一十二月十三日ニ限り候儀誤有之候哉、何ぞ差立候訳も

相知不申候得共、古來より右之日限ニ御祈禱被仰付事

ニ御座候、

一御祈禱古來より臨濟之宗門ニ相付候法式候哉、餘宗ニ

茂有之候哉、都而御祈禱始終之次第委敷可申出旨被仰

渡、古來より臨濟之宗門ニ相付候法式ニ而候得共、當

分二者五山十刹ニ限り被仰付候御祈禱ニ而御座候、餘

宗二者當所弥勒院於 御殿同日同席ニ而相勤被申候、

其外之宗門二者承り不申候、

右之通相糺書付差出申候間、此段被仰上可被下候、

以上、

寅三月十七日 正興寺
玄俊印

國分 郷士御年寄衆中

※(行間)

〔朱ニテ書入〕

季安按、上井伊勢守日記天正三年十二月十三日、如常出仕申

候、從 御前御用之由云々、此日、宮内正興寺・祇答院大願

寺疏之銘也、右通相見得候間、濟家之法式ニ而天正之初より

義久公御代大龍寺屋形にて為被仰付事明証ありと謂へし、大

願寺は紫尾山ニ為有之寺にて、破壊して今ハ無之、此寺跡を

移され今の南泉院のよし也」

右、相良太郎太御記録方見習之節相糺、右通郷士年寄

助鎌田新蔵より申出候書付ニ而候、

敬白願文

南無宇津瀨大明神、抑今度出陣之事、妨國務當怨敵防
戰之企、更非私之所行、然者神慮御感應之儀、何疑可
有之哉、所庶幾者、加冥鑑之威力、耀神德之威光、即
時怨敵退散、武運長久、息災延命、諸卒安穩、殊所發
向敵城早速属手裏者、可奉御神領寄進也、仍願書如件、
天文廿二年

二月六日

貴久判

〔本文書ハ「旧記雜録後編」一九号文書ト同一文書ナルベシ〕

265

常珠寺殿天勇玄機大居^{マヤ} 友久公

心傳妙宗大姉

〔元久公嫡女ニテ
仲翁ノ御姉〕

266

時頼雉髮、二階堂加賀守行泰及其二弟伊勢守行綱・左
衛門少尉行忠、結城朝廣・三浦光盛等念其舊好、
^{法名行善}
^{行願}

島田隱岐介

仕于鹿府、食三町五段於吉田本名和田地、移于吉

田、戰死于蒲生之乱、

268

親宗

右近將監

五歳喪父、仕 歳久公、於吉田移宮之城、戰死于
瀧ヶ水、

膳左衛門

与左衛門

弟二人

后右近將監、移清敷日置^{食十七石}、從軍高麗、寓于吉松、

從常久君如江戸、

妻府下新納助 郎妹

与八左衛門

嘉右衛門初弥七

無男、

養子、実上村権允嫡子、食七石、

上村本來日置人、

元禄八年就本田宗氏家状、

妻伊作入來人、

娶海江田勘右工門女、
十年丑五月十日又呈史官、

一日州高城へ豊後衆着陣申時、同心衆伊岐筑後守殿・外

山備中殿・切通豊前殿・伊地知丹後守殿・上村右近將

殿、案内者地下之衆一人、上村殿と某兩人忍入候、

霜月十一日云々、松山之城追崩、頓而高城へ籠、明

十二日、豊後衆薩広衆へ切掛候、

重種

亀松 四郎 越後 久右エ門 九兵衛

九左衛門

慶長十五庚戌六月廿五日生、母町田新左衛門久直
女

寛永十五戊寅、從 光久公皈自江戸、途經島原至

鹿兒島、十六年己卯 公巡封内、重種奉 命為大

口諸士之衆頭、萬治三庚子八月、奉 命移居覺城

下勤仕、是所兼訴、被侵疾養老於加久藤者有年、

寛文七年丁未十月二日死、法号眞室清見居士、葬

徳泉寺、加久藤之内

女子

高城氏妻 母同

忠充

甚介 才左衛門 仲右衛門 母同

外祖父阿多源左衛門忠利猶子

女子

荒田氏妻 早世

重利

新四郎 早世

母伊地知彌右衛門重延女 高也

重高 延也

弥右エ門 母同前

外祖父伊地知彌右衛門重延養子 高也

女子

川上彦四郎久張室

重興

亀松 久左エ門 次郎兵衛

明曆三年丁酉十一月九日生、母同

270 佐々木新右衛門本

覚

先年 久保様高麗江二月廿八日ニ御打立云々、高麗ニ

而年八ツとり申候、九年めニはたかに帰朝申事ニ候、

爰許にて手仕立候得者、庄内山田ニ罷立候、守田御陣

取ニも諸人并ニ參候て、御普請等相閉目候、長壽院組

下ニ候得者、間之かき仕寄、一入目ニ立被召候付辛劣

271

申候、志和知大手ノ口たれ二ツ御座候、拙子かやヲセ
 おいひしをぬき忍付、二ツ之たれ焼落申候、山ノ口へ
 人数指向申時分、しいの大蔵・谷山次郎右衛門尉・伊
 地知民部少輔、此人衆同心を以鎧合仕候、拙者事ハ其
 口にて出家はたらき申候ヲつきふせ申候て、御奉公申
 候云々、
 慶長十四年
 八月十六日
 大山稻介
 后佐々木幸綱
 町田勝兵衛尉殿

一帖佐山田を祇答院より格護者酉ノ年より丑ノ年まで廿
 九年也、
 一又帖左山田同丑ノ年より御かくこ當年まで五十四年、
 又蒲生ハ卯ノ年より今年迄五十二年御かくこにて候、
 帖左山田從鹿兒嶋直ニ御格護被成候、御地頭平田殿代
 々の地頭職無其隱候事、
 已上

慶長十一年

六月吉日

八十七才
池田出雲守

(本文書ハ「旧記雜録後編四」二二九号文書ト同一文書ナルベシ)

272

出水本ハ田上氏
 一武宮佐藤兵衛惟為覺書
 寛永十四年
 五月十日
 出水
 一阿多六郎左衛門忠昌戦死于有馬、

加世田仁禮氏系抄 甲子四月十三日
 季安書

阿多四郎忠景弟別府五郎忠明後胤

右京進 左兵衛

法名清林道秀禅定門

景鷹

葬於出水龍光寺、

景隆

六郎 法名一圓竜宗居士
葬於加世田日新寺、

忠頼 助五郎 覺兵衛 佐渡守

初景頼 寛永十八辛巳八月晦日病死、
 法名喜叟常悅庵主、葬於日新寺、

景 右兵衛

女子伊地知民部少妻 母佐多越後守忠増女

時頼 助五郎 右京亮 七郎右エ門 母同前

承應二癸巳八月十一日病死、法名一雄宗将庵主、葬于日新寺、

頼真小吉 母同前 十代孫今仁禮七郎エ門

慶長十九甲申年三月十六日病死、法名讚阿弥陀佛、葬于加世田杉本寺、

女子母同前 宮原四郎左エ門景貞妻

女子母同前 山下八兵衛妻

字 一指宿主税系圖 秩父系圖トアリ、重光 号庄司太郎アリ、

字 一妹尾六左衛門系圖 右同断、

一関七右衛門系図 備後守盛勝女 財部淡路守室

一 国分平八郎文書

次郎友貞副申ノ中

一通 関東御教書 弘長二年七月十日

一通 守護大隅入道々佛奉書 同年八月十一日

一 同人書下 正月卅日

一 同子息式部丞催促状 二月十四日

天満宮国分寺云々副進ノ中

一通 守護人廻文 永仁七 同年四月一日

一 催促状 正安三年正月十日

一 催促状 同年八月廿五日

一通 守コ代催促状 嘉元二年正月廿三日

一 同三年五月四日

一 慶長十五庚戌九月本郷貞則授敷根立頼弓法

一 山路次兵衛種雄

新納五左エ門系圖

一 伊勢美濃守母伊東權頭女 一新納四郎右衛門忠陸目安状 慶長十一三十二

禰寝氏

一 能登守右忠贈梅北氏

在左衛門家 一常久関東下向日記 慶長十三年二月廿三日より 同七月廿五日まで、

在熊谷有膳 一高麗入日記 始于文禄二年九月廿六日 至三年二月二十六日、

在平右エ門

一 三原七左衛門訴状 元和八年七月十一日

在伊東氏

一 右松安右衛門奉公状 慶長廿年三月十六日

在諸留安右工門
一於王子大追物射手支度覺 正保中

在勘助氏
一有馬三左衛門申狀 慶長廿年六月一日

在土持氏
一伊集院加賀守忠大 入道是心

一河越右近將監申狀 寬永五年三月十六日

全

一野間孫兵衛政房覺書 慶長十八六月廿四日

在子孫

一池田六左衛門貞秀覺書 慶長七十月一日

系圖

一指宿円田源右衛門

一串木野宮之原才兵衛覺書

寛文三卯二月八十七

永吉臣高崎氏ニ在り

一梅天公御一代之日記

右同

一恒吉与兵衛覺書 正保三年九月十七日

永吉ニあり

一甲斐市之介覺書

鳥丸主膳女山田大仙室

國分

一家村源右衛門住永覺書 寬永十三年三月廿一日

國分長崎氏

一伊集院原口治右衛門物語

桑幡豊後守道隆

女子

喜入撰津守忠政兄室

元龜元庚午四月廿三日生、母上井筑前守女

慶長元丙申正月廿七日年二十七、法名香陰蓮芳大姉

○永正十五年二月廿一日、鹿兒嶋郡田毛名之内式町七反
卅、重貞・兼親・義治・重周・景元・忠臺より巢松軒
へ被下之、

一穎娃種子田七左衛門覺書

一國分八ヶ代五左衛門覺書 二通

一右同安樂伊与入道了心覺書

國分宮内ニあり

一落合若狭入道兼朝覺書

國分
一上原孫左衛門尚興覺書

國分山崎盛右衛門
一平朝臣德重書置 寛正五年

國分德持氏
慶長三七月廿日
一本村善左衛門實昌

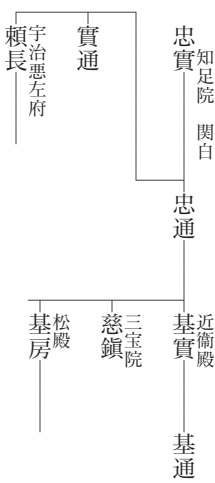
國分松下助八系
一慶長六年辛 三月廿九日、松下番左衛門久治戰死于穆

佐、四十八、

一有村隼人佐覺書 慶長十八年正月廿四日

一早水豊前守覺書 同廿年三月廿日

大口曾木庄兵衛
一曾木之繼圖



大口住伊集院將監臣藤田勘右衛門
一藤田土佐入道平種定申状 天正十五年八月

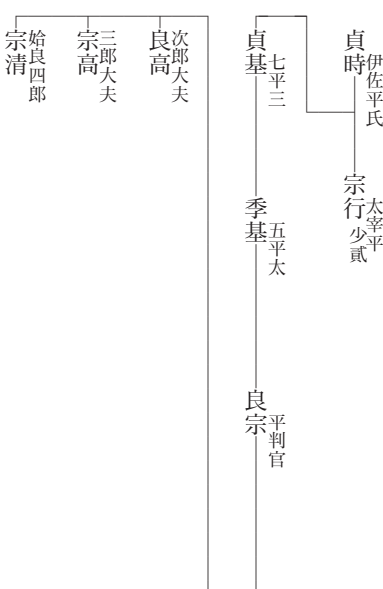
大口二宮伊与
一年代記

大村士北原千左門
一北原次郎右衛門兼秀申状 慶安四年卯二月六日

黒木家中
一柏原源太夫聞書 丑七月廿九日

栗野久木元藤右門本
一富之隈衆記 源七郎以下六十五人アリ、末ハ切ル、

出水伊福氏本



273
地
仁礼覚左系圖ノ中

景晴

安元二年丙申、大橋左中将平經忠平大納言時忠弟也、奉 後白

河院之勅命為薩隅日三州長吏下国、由是景晴辭國上洛、

274 『忠元譜仕込濟』

天正六年戊寅正月

六日に八自天草方日州属御安利候為御使者、使書并鑑

一領進上候、此日新納武藏守迄上津良方より為御勝利之御祝使僧進上、七日、此日從天草方新納武藏守迄天

草之事向後可申入之条、為其筋官途受領之間可申請、自身可致參上之事者遠遠大義之條、必以使節可

奉得尊意之由、先以內義也、天草方へ雖可被成御直書、依繁多奉行中より返章也、

同年九月

廿九日、從大口新納武藏守書狀到來、趣者、從相良方至武藏守被申、大友宗麟日向表江雖一行之企候、一口

迄三而八巨閉、扱八肥州方之衆猶々以被頼思由候て、又々八代迄眞光寺使僧下着候、一圓難成申候得共、自

然自別方洩聞得候而者、得御意相良之事候之条、如何

之由懇立之儀被申事候、右江者御着陣頃初而承候由也、

同十五年六月

一十七日、辰刻高田御打立、小川路へ申刻御着也、此晚

新納武藏守御會尺被申、新武為御餞金銀間進上坎、

『忠元譜へ仕込濟』

275

慶長貳年

與様御上洛ニ付御供衆賦

二月廿四日

自分

一千石 此立衆廿人

新納武藏入道

此出錢百廿五貫七百七十文并出来四拾五石、但右人

數十式ヶ月半ノ飯米なり、

自分

一五百石 此立衆拾人

河上三川入道

此出錢六拾三貫百六十三文并出来廿式石五斗者、但

右人数十式ヶ月半ノ飯米也、

自分

一貳百石 此立衆四人

伊集院左京亮

此出錢廿五貫百五十三文并出米九石、但右人数十式

ケ月半ノ飯米なり、

『忠増子久連譜へ仕込濟』

慶長十八年丑六月廿三日加治木御打立、
御質様御供衆賦銀渡方帳

慶ノ十九年十二月限之つもり帳究申候、

276

口略ス

一銀三貫七百五十七匁六リ

一米三十石一斗四升

新納次郎九郎殿

主従十二人

一銀三貫三百十二匁九分一リ

一米廿六石四斗

江田藤右衛門入道殿

主従十二人

銀子さし引申人衆

口略

一銀百三十四匁二分一リ

新納二郎九郎殿

277

『忠元譜仕込濟』

謹而令言上候、抑當年之御祝儀千喜万悦、幸甚々、此
等之儀先去月下旬至新納武蔵守申述候キ、重疊為御
礼申上候、仍御太刀一腰・御馬一疋令進上候、可然様
御取合可預御披露候、恐惶謹言、

天正十年

貳月廿四日

鎮貞（花押）

伊集院右衛門大夫殿

上津浦上総介

伊集院右衛門大夫殿

鎮貞

（本文書ハ、「旧記雜録後編」一・二六六・一二六七号文書ト同一文書ナルベシ）

278

以上

其後者不申通候、仍今度拙者罷下砌、從内府公被仰出
者、其表御託言之筋目在之条、堺目等之儀、可成其意
之旨候、如何被調候哉、就其去朔日ニ御託言相濟、此
表人質可被差上由、其方堺目之番衆より預案内之由、
水俣より申越候、然共其以後様子不相聞候、如何相滯
候哉、無心元存候、御託言筋目ニ付而、貴所御上洛之

由候、此邊於御通者、以面可申承候、自然滯儀候ハ、相應之馳走可申候間、不被置御心可被仰越候、公儀少も疑敷儀無之候間、其心得にて聊無御疑心、御詫言之筋目可被仰調事肝要候、若又御詫言於被打捨者、上意次第堺目等之儀可成(其意)ス候、猶追々可申述候、恐々謹言、

慶長七壬寅

スレ

五月廿三日

加主計

スレ

▽◎清正△

嶋津圖書頭殿

▽◎御宿所△

(本文書ハ「旧記雜録後編三」一五〇六・一六三五号文書ト同一文書ナルベシ)

加治木

新納仲左衛門家藏文書写抄

安政五年戊午正月持參被為見候間、忠清君・忠秀君御名見得候分拔書置、惣而ハ六十通内外茂候半、

伊地知季安

以上

一書申候、仍唐物や千右衛門四十四歳、帯やの四郎兵

衛尉式十二歳、同下人長五郎十九歳、此三人宮内之八幡へ参度由申候間、状相付申候、先書ニ如申入候、在郷などへ不参様ニ被仰付尤候、恐惶謹言、

正月十四日

新納加賀守

忠清 (花押)

穎娃長左衛門尉

久政 (花押)

新納忠左衛門尉殿

人々御中

(本文書ハ「旧記雜録附録一」一七二号文書ト同一文書ナルベシ)

以上

一書令申候、仍伊作中之里名之内、門内屋敷・加治屋屋敷・西中間屋敷ニ人付之儀ニ付、曾木新左衛門尉殿へ御尋可申儀御座候間、急度被成参候様可被仰渡候、御延引ある間敷候、恐惶謹言、

三月廿八日

山田民部少輔

有栄 (花押)

高崎伊豆守

能乘 (花押)

新納加賀守

忠清 (花押)

市來備前守殿

新納仲左衛門尉殿
人々御中

(本文書ハ、「旧記雜録附録一」一八二号文書ト同一文書ナルベシ)

尚々山民部少殿掃宅にて候間、兩人として御返事
如斯候、以上、

御書状具令披見候、仍而其許鍛冶番匠衆知行侘之儀承
候、御老中衆為被聞召儀ニ候間、為我々不罷成候、被
成御申候者、直御老中衆へ被仰上候而尤候、もはや我
々支配所ハ罷あかり候、為御存知候、恐惶謹言、

▽⑩七月廿三日△

高崎伊豆守
能乘 (花押)

新納加賀守
忠清 (花押)

比志嶋掃部助殿

新納仲左衛門尉殿
御報

(本文書ハ、「旧記雜録附録一」一八四号文書ト同一文書ナルベシ)

猶々形部殿(刑)より御尋被成儀、御返事次第申上候て

一途可申入候、以上、

如來意新年之吉慶猶更不可有盡期候、仍吉松衆中入組
共有之ニ付、公儀へ被仰上儀共御座候、此中形部太(刑)
輔殿御頼にて候處ニ、上使方被為聞候条、一人にて首
尾難被成由候間、拙子相添候て可申達之由、刑部太輔
殿委敷御存之儀候間、御下ニ付可申上候、就夫形部殿(刑)
より貴翁へ被仰候儀共候間、御返事次第御使可申候、
猶期後音之時候、恐惶謹言、

正月七日
同名弥七郎
久正 (花押)

新納仲左衛門尉様
まいる貴報

(本文書ハ、「旧記雜録附録一」二〇一号文書ト同一文書ナルベシ)

『以上四通忠清譜江仕込濟、
年間不知場ニ置也』

280 慶長十九年

正月三日丙辰晴

一新納次郎四郎年頭之為御礼被參候、進上 御酒樽志荷・

鴨式ヶ、御通被給候、

正月十日癸晴
亥晴

一馬越衆貴嶋壱岐守・有村隼人佑・宮原主税助年頭之為

御礼参上候、

正月十九日壬申晴

かこしま

一惟新様東郷長門守所江申請、御茶進上候、御供三原諸

右衛門尉殿・國分但馬守、

四月卅日壬子曇

一新納次郎四郎参上候、但沢原野御馬追見廻被仰候由被

申上候、

六月朔日壬午雨

一江戸江為御使者市成藏人被参ニ付御進物之事、

一緋綾子拾端 沈香十斤

大御所様 江御進上

此間数条略ス、

一御書一通

上井次郎左衛門尉

蒲池備中守へ

一御書一通并御手本二ツ

新納次郎九郎(へ脱カ)

一御書一通 肩衝二ツ

一茶壺壹ツ 水さし一ツ

一茶碗二ツ 但万介焼一ツ

仲次焼一ツ

右者松平河内守殿へ被遣候、

右御使之刻方より御音信物之事、

一御文并御音信物箱二ツ但大小

右八國府 御かミ様ヨリ御料人様へ被遣候、

一御文一ツ豊後守殿御囊様より御料人様へ被成御遣候、

一御文一ツ豊後守殿御内儀より御料人様へ被遣候、

已上

八月七日丁亥晴

惟新様より御言傳之条々

一長崎立ニ付 奥州様川内まで御越、御太儀ニ思召候事、

一村尾源左衛門尉入道被参候、但長崎立被仰付、來十二

日ニ打立申由被申上候、

八月八日戊子晴

一新納次郎四郎被參候、明日長崎へ罷立由被申上候、

一下野守殿より使、様子ハ明日長崎へ罷立之由被申上候、

八月九日己丑晴

一長崎立之人数盛相替残衆在之ニ付、以鬪取立衆相定候

也、

十月朔日庚晴

一新納次郎九郎為御見廻被參候、

281 全

今度幸侃御成敗之砌、無御届故候哉、石治少様御腹立

由候欵、依其子細長谷寺御動座之由其聞得候、各驚人

候、乍去幸侃罪科之事者、連々治少様御存之儀候之間、

定急度被聞召分、物能可罷成候、其御吉左右早々可奉

待候、此等之旨宜有御披露事所仰候、每事恐惶謹言、

(慶長四年)

潤三月朔日

新納武藏入道

為舟判

鎌田出雲守

政近判

比志嶋紀伊守

國貞判

山田越前入道

利安判

平田太郎左衛門尉

宗増判

種子嶋左近入道

久時判

旅庵判

伊集院下野入道

抱節判

町田出羽入道

存松判

樺山權左衛門尉

久高判

桂、、、

忠詮判

伊勢兵部少輔殿

(本文書ハ「旧記雜録後編三」六九六・六九七号文書ト同一文書ナルヘシ)

282 在谷山士東郷長兵衛

曳附

高式拾五石者

右者福永長兵衛尉殿へ此度被下候、但父藤四郎事御

成敗以後雖被召出候、本知行高百拾七石之内貳拾五石被下置候処、ケ様之并之衆本知行皆々被返下候間、御任之由被申候得共、當時御知行相迫候ニ付、今貳拾五石被相加、合高五拾石ニ被仰付候間、可有支配者也、

寛永十二年正月十二日

(伊勢貞昌)
兵部少輔判
(川上久國)
左近將監同
(島津久慶)
彈正大弼同

高崎伊豆守殿

山田民部少輔殿

新納加賀守殿

肥後長次郎殿

まいる

(本文書ハ、「旧記雜録後編五」八〇七号文書ト同一文書ナルベシ)

伊集院谷口村

下竹原崎門女一人

馬壹疋

下屋敷七畝十歩云々

高ニシテ廿五石

右知行、親父藤四郎殿御成敗之刻高百拾七石持留之内、前々廿五石被給、又今度廿五石被遣之由候間、令支配者也、

寛永十二年七月九日

三与

御支配所印

(本文書ハ、「旧記雜録後編五」八四〇号文書ト同一文書ナルベシ)

祐

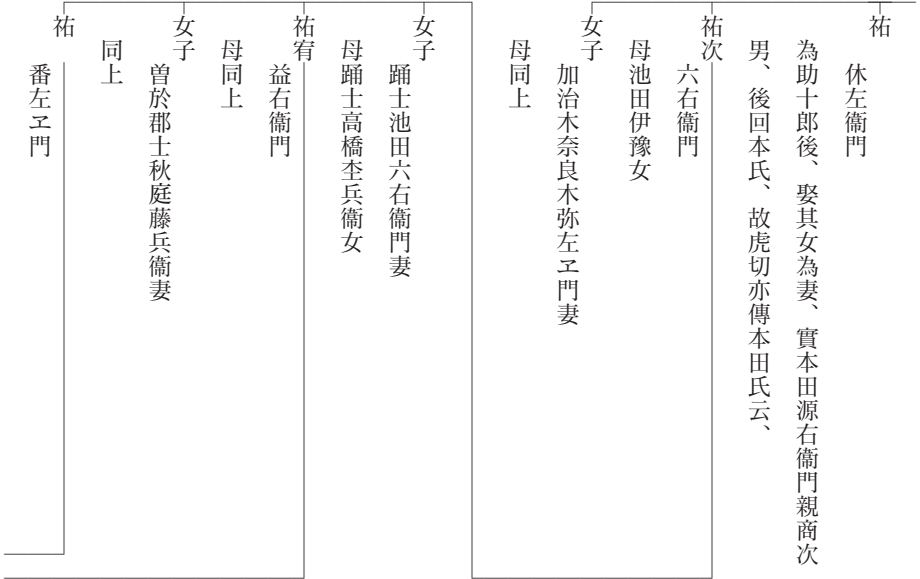
助十郎

從 義弘公師于朝鮮、迨 公獵虎以脇刀刺殺一虎、因名刀曰虎切丸、又 公破哨舟、中半弓箭、不能從歸、後創既瘳、追及 公於伏見、公賞其功賜田祿二百石、然又從攻伏見城遂死之、本姓伊集院氏、為福永猶子、実抱節季男云、

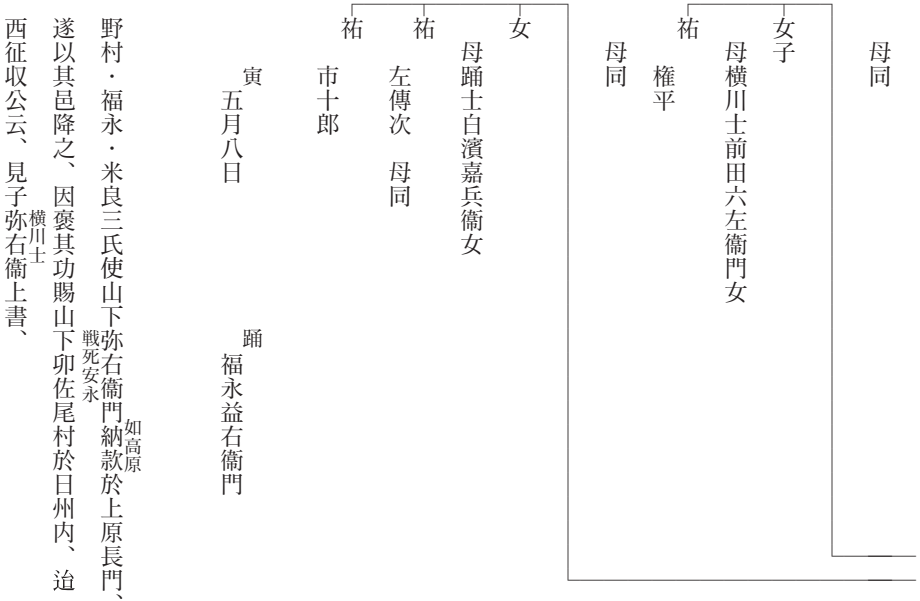
女子

休左衛門妻

母是枝存良院女



285



286 勝久公

修理大夫 入道休庵
嫡忠良

良久 念仏寺

永祿五壬戌生于廣原、母義祐臣福永入道月甫女

女子

桂山城守忠昉后室

永祿八乙丑生、母同

正円 藤ノ

同十丁卯生、母同

忠辰 カメ山

永一十二生、母同
(祿)

287

御書謹而頂戴仕候、仍從小林殿書狀懸 御目候付而

御説之旨奉得其意候、委 奥州様へ申上候て、此方御

談合候様子従是可申上候、道与之書状も[△]昨日可致進

上候処、失念仕候間只今進上申候[△]此状も別ニ相替事も

無御座候、内膳口上ニも同前之御事候、将又昨日五嶋

殿能被遊候、殊外之けいこ有たる藝とハみえ申候へと

288

も、御手前之儀ハ書中ニ難申上候、今日我等所へ振舞

申候、從 龍伯様比紀伊迄御内證御座候て、明日如國

府被參候、此状可預御披露候、恐々謹言、
(◎也)

五月廿三日

伊勢兵部少輔

貞昌判

曾木五兵衛尉殿

(本文書ハ、「日記雜錄附録一」四一五号文書ト同一文書ナルヘシ)

以上

『忠清譜仕込濟』

遠路迄預御状具ニ令披閱候、然者道純御侘之儀共、前
河野文右エ門通宣ノ老号

御取次申候、其为首尾様子承候、吾等事も當分此地へ

罷居候間、喜入休右衛門尉殿へ状進候間、子細被仰入

可為尤候、随而者道純氣相無快氣、貴老御心底存計候、

吾々事も多年之知音有之所ニ、千萬殘多存事候、御侘

今月中ニも不相濟候者、來月者早々覺府可致祇候候間、

何様肝煎可申候、恐々謹言、

十月十六日

新納加賀守

忠清 (花押)

河野郷兵衛通政ノ老号
白齋老
正保四正月卒 御返報

(本文書ハ「旧記雜録附録一」二二八号文書ト同一文書ナルベシ)

289

起工 竣功 成功
告竣 上梁

290
正文在琉球国司

覺

一 御借銀七千貫目余御座候、琉球口より唐之才覺ならて
ハ御返弁不罷成ニ相究候条、其御分別毛頭御油断被成
ましき由、堅申達候通申上候事、

一 其元へ當夏冠船着岸候ハ、勅使へ何とそ被成才覺、
唐へ船数參候而御借銀御返弁候様ニ随分可被入御精之
由、各被為申上候事、付勅使送王舅ニ國頭親方、大夫
喜友石親方被差渡、唐にても御侘あるへき由候事、御
侘条之事左ニ書記、

一 三年ニ一度之進貢之事、
一 毎年年頭之御禮之事、

一 馬・硫磺相重之事、

一 毎年 御誕生御祝言可被申進之事、

一 やこ貝之から毎年積渡進上之事、

一 進貢船前代ハ三年ニ一度ツ、ニ而、或馬十五疋或拾疋
八疋充、いわう式万斤之内外參候処、前ニしやな唐へ
被渡候而御侘被申、馬四疋・硫磺一万斤ツ、ニ罷成、
御弓箭以後十ヶ年御免ニて不通候、其後色々唐へ御理
被仰分候へ者、五年ニ一度ツ、ニ相定候欵、右五ヶ条
之内御侘立候へハ、船余多差渡儀口能有間敷候間、銀
子過分ニ相渡、御為ニ可罷成との各被仰由申上候、進
貢之儀前代より定たる儀候条、琉球より之失墜たるへ
き由候、四ヶ条之儀相調候ハ、船数可參候、取仕立ハ
鹿兒嶋より之御失墜たるへき^⑤申談候、進貢三年ニ一
度ツ、可渡御侘立候へハ、一年ニ船一艘充可渡事、其
故ハ、今年渡唐申候使者北京迄被參候故年越にて候、
乗船者其年帰帆、次之年迎ニ參候、於其儀ハ一年ニ一
度ツ、之賦にて候事、

一 勅使當秋帰唐候刻、船一艘ハ王舅之乗船、又一艘ハ武
官之衆百人程冠船ニ乗、其元へ被參候由候、船せき候

八ん間、馳走ニ此衆のせ候而渡唐候様ニと談合申候、
左候へハ、二艘ニ銀子六百貫め程之代系可乗由被仰候、
乍去七百五十貫目程可被渡之由堅申究候、就夫銀ハ(中略)以
御物可被調之由申候事、

一銀子八拾貫目程ハ其許王位様御物毎年唐へ被遣度之由、
各被為申上候通具ニ申上候事、

一数年鹿兒嶋ニて糸かけやう計目おもく候て、糸之へり
王位様御物系にて被成弁候、其上此中渡唐船取仕立遣
物從其元之御失墜にて候、付才府官舎之手前よりも糸
之かけへり弁ニ付身上迷惑ニ罷成候通承及たる様子、
細々披露申候事、

一渡唐船二艘ハ水手等其元ニて可相調候、若三艘ニも罷
成候ハ、道之嶋之者を水手ニ可被仰付之由被成御申
候、是又具申達候事、

以上

(寛永九年)
王申

八月廿七日

最上土佐守(義時)

新納加賀守(忠清)

金武王子様

國頭親方様

勝連親方様

参

(本文書ハ「田記雜録後編五」五六三号文書トホボ同文ナルヘシ)

291

久林

助七 左京亮

天正四年丙子五月廿一日生、母園田筑後守實祐女

『忠元譜仕込濟』

292

天正十五年丁亥春正月、初 松齡公在津加牟礼、聞家
久既入府内、召諸將會議、或言如府内与家久合勢、或
言今棄南郡而去不可、秋月種実遣使勸取玖珠郡曰、非
特我敝邑之幸、即高橋氏亦将免於難矣、玖珠人亦請之
者屢矣、松齡公乃遣川上久隅・町田久倍・新納忠元
将兵入玖珠郡、於是小国北里某等望風而下、二十六日、
松齡公進屯玖珠郡野上、二月、遣諸将攻下莊某、某請
降、許之、然猶未下、三月朔日、関白親帥大軍討筑紫、

初 松公与家久分道擊大友氏、已入豊後、城邑皆降、及聞京兵至、皆叛應之、初歲久屯白仁、將會家久於府内、疾不能行、又聞所得城邑皆應関白逼白仁、乃議班師、遣長野隱岐告於 松公、七日、歲久發白仁、大野七郎久高等送之、 松公聞関白前鋒秀長已至豊前、十一日從野上還、分軍為二、自將一軍適府内、使征久率久倍・忠元等將一軍從日田過秋月出上筑後、是日 松公宿健軍、明日關白前鋒已至湯嶽、与小寺氏・迫間氏合兵來攻、 松公擊敗之、乃至府内、十四日、志賀道益与伊集院三河・犬童休意等遂去菅迫城、會忠元等師、豊後瀧田城鎮將佐多久政為敵所攻力戰死之、及家臣死者五十二人、一色昭秀・興山上人到府内、說 松公與関白和解、諸將弗聽、議還守要害之地以距関白之師、松公從之、十五日夜、從府内如三重、路歷清田、前後遇敵、輒擊破之、貞昌等有戰功、伊集院久宣等去鶴崎城、遭伏死、十六日、 松公至三重會家久於松尾城、二十日、 松公及家久俱發松尾城、踰梓山、家久還佐土原、 松公抵高城、會 公於都於郡、征久之趨上筑後也、欲与豊後切加布城鎮將伊久信俱歸、行聞久信已

去而還、會岡城主志賀氏、遣大森彈正屯宮地、圍大野久高・弟子丸右京・犬童休意等於坂梨城、久高告急於征久、遣町久倍・新忠元・伊久信救之、久倍・忠元等拯出久高等、共保津守城、四月六日、秀長以二十万至日州、軍於財部・高城之間、山田有信守高城、使宮部善祥房等屯根白坂、久倍・忠元在津守、関関白年已至肥後、將守隈本、隈本・宇土皆叛、乃還走八代、十七日、(公脱之) 松公・家久等擊根白坂營、不克、忠隣陣歿、死者三百余人、一色昭秀・木食上人及安国寺惠瓊復勸公使講和、 公乃從之、二十一日、忠棟為質、遣使令有信降高城、不肯、又遣町田駿河久充諭之、乃降、以子有榮為質、前此松浦筑前有罪出亡奔京師、遂事秀吉、至是為之先路、据肥后谷山城、忠元・久信攻陷之、還保関城、而有馬氏叛、乘鬪艦燒比奈古、高田鎮將忠永懼及棄邑奔亡、関白軍至宮之原、舳艫蔽海而下、関八代人見之、皆有畏色、忠元等乃去関城、會征久久倍於八代城、及夜遂相隨俱出走玖麻、比至坂本東方既白、而関白軍已至八代、征久等至人吉、於是相良忠房佐我軍在日向、使其臣深水宗芳守城、称病不出、諸將將逕(衍之)

入城中、以宗芳行濟玖麻川、而後免之、忠棟為質之日
忠元還大口、関白乘舟從佐敷至出水、領主忠永迎降、

二十五日舟至川内、從流而上、次太平寺、違鹿兒島十

三里、五月朔日、公與 松公發都於郡、公還覽島、

松公還真幸、秀長移屯野尻、関白之至川内也、高城

水引諸邑望風而下、獨平佐城主桂忠昉閉城固守、関白

遣小西行長・安治・嘉隆攻之、不能克、公使人諭忠

昉、乃降、二日、見関白於太平寺、公遣河野猪石衛

門通貞、如太平寺董成、通貞反 命、六日、公發鹿

兒島行至伊集院、宿雪窓院、祝髮、齋名龍伯、八日至

水引、因佐々成政・堀秀政見関白於太平寺、関白自脫

佩刀二枚賜 公、明九日、関白下花押書、使 公領薩

摩如故、公反自寺、比至伊集院追求質子、公以少

女龜壽為質、公還覽嶋、群臣朝賀、十八日、関白薨

太平寺宿平佐、十九日、松公往見秀長於野尻、又以

赤塚三左重政・佐谷田覚右重正為質、二十五日、関白

朱記書賜 松公大隅、令肝付一郡授忠棟、賜久保諸縣

郡、二十六日、又命 松公曰、遣久保入侍、且納一人

為質、松公見関白於鶴田、拜大隅及諸縣郡也、初大

口地頭新納忠元与祁答院領主歳久謀擊関白軍、竊言於
公曰、関白提大兵侵我疆、曾莫一人枝梧、天下將謂國

無一男子也、請邀諸路擊之、公不許曰、已納女為質、

奈何忍棄之、二子重請曰、謀國者不顧家、且人家男女

往々多夭折、願割所愛、視猶夭折、奈之何以一女子故

廢國之大事也、公固不許曰、与人講和約已成矣、背

約不義、且吾以社稷之故祝髮謝罪、卿等不宜負我、二

子乃止、於是忠元投知学寺祝髮、自號拙齋、往見関白

於曾木天堂尾、関白賜長刀一枚・道服一領、再拜而退、

関白喚回之謂曰、武藏汝復与我相距乎、忠元應声答曰、

唯寡君命、若使寡君不得事殿下、則臣無所逃命、関白

稱善、明日関白赴肥後、忠元送至羽月郷園田之間、駐

馬道側相送数町、関白遣騎士召之、忠元即至下馬拜、

関白親賜搦壘扇一柄而去、壘之天堂尾、地頭館西二十余町、
係里村、土人呼曰関白陣、家久

往見秀長於野尻、中毒而病、六月五日、卒於佐土原、

大田氏系 用久二男延久、忠福 新三郎 中務大輔
下野守 老号為足

母忠国公女、領川辺平山城、明應五年七月廿三日母堂

卒、法号玉泉智芳大姉玉泉寺殿、在川邊、初曰長興寺、

293

伊作家造立也、迨寅木主改寺号云、

永祿四年辛酉、大中公使有泉坊如關東代謁鶴岡廟、

二月十日、發行於京師、彫刻八幡像三軀、

六年癸亥、負脊祠于覺府清水今八幡此也、

天正三年乙亥六月二日、從金吾出船市來、

六年戊寅、豐州遣使船于南蛮、六月、使成覚坊留其婦

於種子島、六日赴之、十一月十二日、大敗豐師於高城、

十二月 忠平公遣使於肥後、十八日、出舟于市來、

七年己卯正月四日至松橋、八日至隈本、十五日至三船、

皆說之、惟宇都侯・城侯聽命、

八年庚辰十月十六日、眞蓮坊從上并覺兼如肥後、二十

五日、使于宇都侯・城侯・龍造寺侯・秋月侯、此日出

船米津、此時隆信出兵、伐蒲池於築川、鍋島陣于酒見、

至佐賀說隆信、不聽、如秋月、就內田助右衛門說種実、

聽命、十一月廿二日、薩衆伐合志、秋月護送隈本、而

叛反命、

十年壬午九月、使于幕府及毛利侯・小早川侯・吉川

氏、長宮昭光・昭秀、十日赴之、十月四日、至土州浦

戶、時長宮師于阿州、十八日歿回說之、讚州觀音寺殿
護送、十一月二日渡備後鞆、三日詣山田侯、幕府起

居陣信長命 幕府感喜、四日召見眞蓮、賜太刀・馬、

許 公二殿字、賜 公内書、乃遣布施氏來于薩州、十

二月十七日、付上使發吉田至防州山口迎年、

十一年癸未正月十五日、至秋月會隆信叛、遮路留滯四

十六日、由惠利内藏助護送得回國、閏八月、從中書君

伐阿蘇氏、乃与常陸坊使于高知尾、西越後守來為質焉、

十二年甲申二月、遣中書家久伐隆信於島原、九月、自

肥後吉松陳移于高瀨、自豊後戶次道雪・高橋紹運陣于

筑後、十月二十二日、薩衆引兵回至八代、報平田老、

又報忠棟於飯野、

十三乙酉十一月十二日連長至鹿、鎌田刑部使于京、蓮

長使于中国、而朝 幕府、四月十一日、自藝吉田渡于

伊豫、幕府使布施治部少・多羅尾勘左、賜 公奧馬

二匹鶴毛、蓮長受之、時因柳沢薦賜 武庫公義字、蓮

長呈之飯野、六月十一日回鹿、

295 在本田次郎右衛門 口略ス、

一 從第二親中納言親峰廿代

本田親豊越後國之本多之庄居住、分國越後・信濃・越

前也、去 文武天皇世、又 仁明天皇葉ニハ伊豆国居、

時平家都落候、以後元暦元年ニ北條四郎義時息女妻合、

白川法皇ノ時上鳥羽ニ立家居、文治五年十月一日ニ息

子親恒ヲ從 賴朝被召、三宝祇殿為 勅使蒙 仰條曰、

忠久様十五歳仁而候欵、下三ヶ国江有下向付テ本田ヲ

可父、於永々コウケンスヘシ、若島津断本田可續、又

本田断エハ島津可紹、家中ニ有ハ本田力領地ヲ可有檢

断、私ニ以上七ヶ条御判給リ、建久元年正月十一日立

京、二月廿八日、日向国眞幸般若寺ニ着、三月二日、

大隅国分府中着、薩隅日廻テ皆人々ヲ手ニ付ケ、亦建

久三年ノ正月二日上洛、廿二日京ニ着、同月十日ニ

賴朝將軍ノ位ニ成給、 忠久島津大夫判官ノ位ニ着七

給、行幸ニ諸大夫ニ吾等モナリ、御伴仕テ候、同年八

月一日、 忠久三ヶ国ニ下向之御伴仕下着ス、後代為

甲斐守親賢比書秘(此方)テ書置卜云云、雖不親賢仁ニ 賴朝

御死去ニ付テ建久九年三月二日致上洛、 賴家ノ前ニ

伺候申、正治二年之正月下向ス、亦建仁三年正月二日

ニ 實朝天下ニ成セ給ニ付為喜又致某上洛而候、為後

代書置者也、

永仁貳年八月十八日

山城守親嵩

所持書写仕候、

右之書在之本之俣写之、

296 在河野造酒丞家

覚

一 就今度文書改被相廻候条、暖衆へ被致相談、随分心懸

可被尋出候、尤御急用ニ而無之候間、緩々（マヤ）与致滞留可

被承届事、

一 今度諸所へ被遣候文書改、必御直判之書物ニテ無之候

共、可達御用事ハ可有持參候、就中軍記式古日記(マヤ)是又

可為御用事、

一 諸所古城・古陣古今之名銘之承届書付可被參事、

一 敦賀城之古昔之文書ニ相見得候得共、何方へ在之儀も

不相知候条可被承届事、

一堂宮并諸寺ニ從古之書物共在之候、左様成書物之内ニ

可達御用物茂可在之候間、其所之嘍衆被致同道可被見

届候、左候而、持參難成物者可被写取事、

右条之可被得其意者也、

承應四年五月十一日

鎌田筑後〔黒印、印文「政昭」〕

297 新納八代

忠勝

忠常 孫四郎

左馬助 忠堅

志布志落去之時如
伊東方被參候也、

女 伊東權頭妻

佐土原繩之馬場ニ被罷居候人
也、後金吾様鶴田被召置候也、

女 伊勢美濃守殿母儀也、

298 在垂水川崎藤兵衛

小野氏 横山 狩田 海老名 云々

篁 八世略

横山 資孝
長元々年八幡殿臺目役

横山次郎大夫 經兼

野古院僧

成任 野三天夫

刑部丞 野三次郎
成綱 承久京方

忠兼 野五

成尋 成南寺修行
子孫改姓等、

師兼 田屋二郎

女子 右大將家御乳母
近衛局

光兼 山口五郎

宇都宮左衛門尉知綱・筑後守宗
綱母

299

寄進

先祖相傳所領三ヶ所事

在管薩摩内 伊作并日置北郷
同南郷外小野

副進次第調度文書等

右、件所領田畠等者、年來嶋津御庄寄郡也、而天下騷
動之間、公私為軍地、人民百姓併逃散畢、然間庄國兩
方課役、如何可令勤仕哉、於于今者、令寄進一圓御庄
御領、致安堵計畢、有限於年貢所當物等者、為重純沙

301

山崎藤七郎 系

盛秀
号肥後吉兵衛、

盛張
号肥後内藏助、

女子

肝付甚右エ門妻

300

谷山佐渡

純辰

平左エ門

純次

谷山九兵衛

实有馬隱岐純勝次男、
寛永三年十月四日權菴朝榮
居士

純眞
次左エ門
妻伊地知筑後重房
(女脱カ)

山田弥左衛門有雪
下金剛院親典女

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二四号文書ト同一文書ナルヘシ)

汰、追年無懈怠可令運上京都之状如件、但為後代證文、
於下司・郡司・惣公文職者、重澄以子々孫々、不可有
相違旨、為被成下御下文、勤状以解、
文治三年三月 日
平重澄判

303

經房

肥前守

經安

肥前守

成功萬年誰予
仁而勇二難并仰
功在寬仁大度人
武勇有君無比倫
又在寬仁大度人
又能治國又安民
六軍麾下爭先後

看君臣道大明
惻隱心深吾戰將

302

寄月蓮

大中様御年忌之時

門司

光空

萬境清風共一涼
吟心今夜惣無方
銀蟾浮水新□淨

又是池蓮發遠香

仁者必有勇

女子
面高連長院俊昌妻
隆峯
藤兵衛
万治二己亥正月十日
改肥後氏復山崎氏□
也、

盛貞
四郎左エ門
山下宗安猶子
盛長
吉兵衛
宮里仲右エ門猶子
盛純
慶右エ門
谷山宮内左エ門猶子

島津立久公夫人道□性壽

明応元五十二卒、四十五、

右本在和田四郎兵衛、

大山伊豫廣綱女財部傳右衛門盛堯妻

304 ○忠弘(一七)

主馬 母龜山又兵衛久儀同腹、

宗門奉行 寛文六丙午八月十(一九)日卒、葬大徳寺、

法名性室常法居士

良兼

初忠通 主馬 寛文六為忠弘嗣、実府土岩元清左(一八) 甚兵衛 甚七

寛永七年二月十五日生、母面高主馬女

元禄六年酉十月四日納殿役、

五郎右衛門

穎娃樋渡傳左衛門二男

二男 甚兵衛

宝永二年酉十一月朔日、初見町田孫七贊、

正徳五年未十一月十六日分族、国老将監 傳命、

延享二丑十二月晦日、自請辞土籍、如家跡可以嫡

子請国老主計使有川幸右衛門許之、

甚左衛門

初熊助

延享三寅正月十六日為父家跡、

四年卯八月十五日改甚左衛門、託人献中紙拜家督恩、

年尚幼也、

良閑

初熊次郎 甚八

平八

為伊藤三次後嗣、

良次

定之助 甚七

川上瀬兵衛三男

都之城鬼束常心系圖ノ写巻端ニ、此正文久保友元謾雜書虚妄紊之者夥矣、今省之而不寫、

306 正文寫在国分士山崎盛右エ門

一平千代松丸か事者、祁答院播磨守徳重嫡子たりし上、一子の事に候

間云々、

一三ヶ國不慮の世上出来候といふとも、千代松か事者、

一篇に▽[㊦]御屋形△立久御方御用に可被立候、是より外に別の意見被申候する方ハ野心たるへく候、各の中より沙汰有へく候、

一徳重時代にはなをつかせ候する者、同徳重時代になをし候ハん落人、院内に御入有間敷候、かくれ候て出入時者、其用心も入へく候、嘗會を取おこなひ、[㊦]文大安二

年に定をかれ候日記のことく、御こしはまとの下の儀式、御こしかき二人つゝハ各々より出候、鎭流馬六騎、祁答院六名の役にて候、同的持二人、弓袋さし二人、是も名より門まハりに可仕候、懈怠なきやうに各仰談られ候て、御奔走有へく候、

一院内之田数之事、百二十町たりといへ共、久本領之内

四百四十四町之ないけんの所也、寛亨徳元年壬申年、奥州忠國よ

り三ヶ國算田候て、一反に百つゝの反錢かゝり候、其

時入來當所にハ、町田殿・河上因幡殿・伊地知田嶋殿

奉行に被越候、あまりいそかれ候間、徳重ハ両津御供

仕、逗留申候へ共、潤八月、虎井・柏原・紫尾・久木

野々郷子・後田・湯田之事者、留守に算田候、同潤八

月晦日、りやう津より罷歸候、同九月朔日より、時吉

之穴川口よりはしめて、てろく田さのほり一手、ねす

ミか城より屋なつめのほり一手、舟渡田より上しんか

いに向て一手、如此はしめて、佐志・時吉・中津河・

黒木・大村・久富木・山崎・上舟木・下舟木・木洪・

蘭牟田・長野まで算田仕候間、十月廿日隙明候、院田

の田数本町之内二十四町、水損ふミいたし候分百六十

307 正文在加治木士長谷場次右衛門

今度言上仕候之處、別而御懇 上意、忝面目之至候、

併各御召合故候、畏悦不少、殊近比見事御馬被下候、

外聞之至不可有此上候、秘藏可吳于他候、仍薩州當方

和談之儀被成御吳見候欵、就夫被仰遣候之様、◎趣得其意

候、於子細者、至新納武藏守殿申談旨候、定而可被聞

召候之哉、益可被添御心之事所希候、於向後深甚可得

御意候、毎事御指南可為大慶候、恐之謹言、

十一月六日 鎮尚判

喜入攝津守殿

河上前上野入道殿

村田越前守殿

平田美濃守殿

伊集院右衛門太夫殿▽◎御報△

メ

進上 伊集院右衛門大夫殿 大夫鎮尚

到來天正五年丁丑二月日

天草

八町八反、已上祁答院五百六十八町八反にて候、此分

屋形へも付進上候うへハ、院内にてハ其時の田数のま

ゝたるへく候、我等か童へにて候し時、原口ひたち殿・

小栗殿城誘を十ひろつゝあて候へハ、それ▽◎程ハ△持

す候とて、八ひろつゝせられ候、其後ミなミ殿御越之

時、▽◎十五町つゝの日さつしやうの△日記には、ひたち

方ハ五町三反、小栗方ハ五町三反、此日記を見せ候へ

ハ口あかす候、廳而へい共ぬらせ候、如此之事をおも

ひ出し候へハ、千代松童にて候とて、申度ま、申され

候方も有へく候、よくく御談合有へく、五百六十

八町八反の日記文書箱の下ニ取置候、◎密尋得にハいかや

うの用所候とも、五人十人御寄合候て、千代松わらハ

への程ハ御吳見有へく、めやすの日記にてちかくかき

候て置候、それにて城誘等の事仰付られ、院内五百六

十八町八反之内百五町八寺領、百三町八神領とおほえ

候、

外数行不写、

甲申也 平朝臣徳重在判

寛正五年 于時天文廿一年壬子二月時正吉

〔本文書ハ「旧記雜録後編」一八九六・九〇八号、「同附録」一〇三五号文書ト同一文書ナルベシ〕

慶長十九年甲寅正月分

日記

正月三日丙辰晴

一新納次郎四郎年頭之為御禮被參候、進上御酒樽壹荷・鴨式ヶ、御通被給候、

正月六日己未曇巳刻ヨリ晴

一喜入攝津守殿より年頭之為御禮使者田代源藏被參候、御酒被給候、

正月七日庚申晴

一佐多伯耆守年頭之為御禮被參候、進上御樽壹荷并目籠、吸物ニテ御酒御寄合、

一河上上野介殿年頭之為御礼被參候、進上御酒一荷并目籠、吸物ニテ御酒御寄合、

正月八日辛酉晴

一星山弥右衛門尉子仲次与名被申候、為御祝儀瓶酒一對進上申候、

一南原助左衛門尉名被下候、為御祝儀御酒錫一ツ進上被

申候、

正月廿五日戊寅晴

一土持左馬權頭年頭之為御礼參上、御通被給候、

正月六日己未曇巳刻ヨリ晴

一喜入攝津守殿より年頭之為御礼使者田代源藏被參候、御酒被給候、

二月七日庚寅晴

一松浦肥前守殿より年頭之為御祝儀使者新敷源介進物之夏、

一御太刀一腰 御馬一疋

一書狀一通 諸白樽一荷

一臺二ツ 昆布 小蛸 魚

右使者より鳥目百疋進上候、即御寄合アリ、御座ニ喜

入攝津守殿・渋谷石見守殿・了齋被參候、

家久公御娘二月三日御誕生なり

一奥州様御繁昌為御祝伊地知縫殿助被參候、御酒被給候、

三月廿一日癸酉

一惟新様御腰物之かね被成御焼せニ付、為御覽氏貞所へ

御出也、

四月十三日乙未晴

一上方書物屋之源三郎為御礼被參候、進上泰平記一部并註在之、

四月廿八日庚晴

一惟新様御氣色卒度悪敷様ニ御座候ニ付而、為御見廻被上候衆、比志嶋紀伊介殿・野州・中書・攝州、

六月十日辛卯晴

一正源院へ御状并葉茶壺ツ仲次焼被遣候、

一喜入攝津守ヨリ使被上候、様子ハ壁ぬり御遣被成候御礼被申上候、

六月廿二日癸卯晴

一喜入攝津守殿父子參被成候、進上物之事、

一瓶酒二對并食籠

一爪臺(ツ)一ツ

右、父子へ御酒御寄合并御振舞有、相伴了齋、

八月十一日辛卯晴

一奥州様へ御茶被進候、御座 御両殿様・豊後守殿・喜入攝津守・別府大舍人助・東郷長門守、

九月廿日庚午晴

一小城權現之座主職善乘院へ被仰付候為御禮被罷出候、

鳥目百足進上候、談議所より案内者として使僧被參候、張紙

本文座主職之事、善聚院由緒帳ニ、安養院成正院頼眞より奉願、盛傳法印へ開基ニ而別當職被仰付、其後元和年中勘略之節神領被召上候云々、

右之通御座候而、慶長十九年座主職被仰付候訳明白

ニハ相見得不申候事、

十月四日癸未晴

一相良清兵衛尉殿より使犬童長介殿、惟新様より兼日

鑓の柄被成御所望ニ付、とねりこのゑ二本進上候、清

兵衛尉殿より日野内膳正迄書状被遣候、則返礼被申候、

右長介殿鳥目百足被成御遣候、并御振舞有、相伴宮原

主計助、

十一月十二日庚申曇

一喜入攝州被參候、南蛮菓子進上、

十一月廿日戊辰小雨

一上方衆塩屋ノ善右衛門尉被參候、鳥目百足進上候、

十月十五日甲午晴

一塩屋善左衛門尉下向ニ付被參候、進物之事、

一杉原一束 一木綿 踏皮武足

十二月六日甲申晴

一古江左兵衛尉從江戸罷下候、

一書状并下緒一具 新納次郎九郎

一書状二 町田勝兵衛尉殿

一書状一 吉祥院

一書状一 江田藤右衛門尉入道

一書状一 上井次郎左衛門尉

蒲池備中守

十二月七日乙酉晴

一伊東平右衛門尉入道之内々、徳永和泉守内々、脇本御

假屋守之女房懸 御目候、瓶酒一對宛進上候、

十二月八日丙戌晴

一伊地知民部少輔被參候、様子ハ、山野之地頭職被給候、

為御祝儀鯛一掛・御樽壹荷進上、御酒被給候、

十二月十八日丙申陰雨 午刻ヨリ

一西ノ丸ヨリ御小袖壹ツ御進上、御使新納加賀守御酒被

給、其後御振舞有、

張紙

本文加賀守ハ喜右衛門家之祖ニ而ハ有間敷哉、忠清ハ天和の初比刑部太輔と成り、寛永八年比ヨリ加賀守と見得たれば、いつれか是なるか、

正月三日丙辰晴

一高野傳兵衛尉・佐良々彦兵衛尉・小嶋三左衛門尉年頭之為御礼參上被申候、

正月七日庚申晴

一本田伊賀守此間廿六人 略ス、

佐良良善介下十四人 略ス、

右之衆年頭之為御礼被參候、御酒被給候、

二月廿二日乙巳晴

一鹿兒嶋より御使佐良々善介被參候、御意趣直ニ被聞召候、御使ニ御振舞有、

一山口駿河守殿より御書田畑左兵衛下向ニ參候、但かこしまより御使佐良々善介持參候、

八月廿六日丙午晴

一 奥州様より御使鎌田左京亮被參候、御意趣ハ直ニ被聞召候、付依御所望弥右衛門尉燒葉壺三ツ被進候、御使

ニ御振舞有、

九月廿六日

一 鹿兒嶋へ御使本田伊豆守被參候、

一 萬介燒物之事、

『忠清譜ニ補入濟』

尚之御報次第ニ隈元へ滯留申仁へも可申越候、將

亦一人ニ付一日ニ銀子壹匁ツ、隈元にてハ召仕由

候、為御存知申上候、(衍力)以上、

▽◎追而令申候、求麻へも兩度一人指越候へ共、無相替儀候、

以上△

態令啓上候、仍肥後表之物音申來ル度之ニ相替候間、

去拾九日ニ此元衆中肥後表存知たる仁差越申候、唯今

一人罷歸候間、申來候通、然之雖無替儀候申上候、

一 隈元城受執衆誰共未相知候由候事、

一 竹中采女正殿より使者兩人主従五十人ほとにて隈元へ

被罷居之由候事、

一 城無吳儀可被相渡之様子と見得候由候、諸侍皆之屋敷之掃除普請之由候事、

一 肥後守殿御藏米千式三百石程有是之由候、人数相應(○願)さん用候へハ、三日之飯米有之と町説ニ申之由候事、

一 諸侍前(○願)後方之ニ妻子荷物等被相送候へ共、此比者宿元

之様ニ妻子被罷歸人も有之由候事、

一 加藤右馬允從江戸二日路被參候へ共、又之江戸へ被召

寄、肥後守殿出合之儀御噫ニ罷成、事能相濟たる由、

去廿日比ニ江戸より相聞得たると風聞仕之由候、乍去

風説にて御座候ハんと下之申之由候事、

一 筑後・筑前・肥前何とハ不相知雜説申候、隈元侍衆之

馬買取之由ニ候、筑前守殿家中内乱おこり候へ共、頃

者事濟たる様ニ申散之由候事、

一 求麻より隈元へ為聞取七人罷居候内、式人ハ筑前之様

ニ參候、式人ハ豊後之やうに參候、三人ハ隈元へ罷居、

右馬丞下着ニ而城相渡候を見究可罷歸之由候て滯留仕

之由候事、

一 隈元分限之衆者荷物等不相送候、式百石・三百石取之

衆人躰計屋敷之番ニ被罷居之由候事、

一 井手田宮内少輔・正林隼人・加藤与左衛門尉・飯田学兵衛尉、新参之衆ニ者田中大膳亮・鎌田喜左衛門尉を始として四十八人程此度一鍵可仕之由被申之由候、乍去諸侍就中普代之人数無合点候間、無吳儀城可相渡之、物音之由候事、

一 肥後守殿供之人数又内迄も老人も未被被下^テ之由候事、
 一 爰元より遣候仁無口能城へ罷登、ゆるく^と見合候へ共、弓戦之用意とハ不及見之由申來候、大名衆門ニ者手鍵二三本ツ、御座候、不紛談合之躰ニ見得候由▽◎候事△

一 肥後守殿上洛之刻、水子之内一人罷下候、左様成ニ爰元より参候仁面談仕相尋候へハ、替儀も無御座之由候事、

一 此中者今月廿五日ニ城相渡候由候へ共、于今日限不相知之由候事、

一 憐國^隣より限元之様子聞合ニ人を被付置之由候、此元より遣候仁も式人限元に滞留仕候、來ル廿八九日比可罷歸之由申候、此度遣候仁限元之様子連々能存候間、城相渡までハ可被召置候之哉、御意次第ニ可仕候、自然

310

城相渡までも被召置候ハ、彼仁も少身之躰にて、殊ニ肥後表ハ銀子迄を召仕候間、銀子を被下候様ニ有度候、連々肥後表之様子不存仁者遣候ても然と物音も不承候間、申上事ニ候、猶追而一左右次第可申上候、恐惶謹言、

寛永九

六月廿五日

新納加賀守

忠清(花押)

川上左近将監様

喜入攝津守様

人々御中

(本文書ハ「旧記雜録後編五」五四一号文書ト同一文書ナルベシ)

猶々限元・八代之城も廿二日ニ相渡之由申候、相良

清兵衛尉殿も昨日廿二日ニ夫雜百廿人程にて^{◎ナシ}如

限本之被参たるよし申候、手まハリの道具も五六人

程にて被参たるよし申候、已上、

急度令啓上候、仍此中限本召置候者只今罷歸候、去廿

一日ニ上使限本へ御着にて候、以之外多人数之由申候、

八代之城請取之御人衆廿一日ニハ川尻被成一宿、翌日

ニ八代ニ着せられたる由申候、隨者自然此境上使於被成御覽ハ御案内者可仕由兼日被仰聞候、左様ニ候ハ、

兵具等何程ニ持せ申候て能候する哉、御意次第ニ可仕候間、御報可被仰聞候、恐惶謹言、

寬永九
七月廿三日
新納加賀守
忠清 (花押)

川上左近將監殿

喜入攝津守殿
參人ノ御中

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」五五三号文書ト同一文書ナルヘシ)

覺

一黃門様被成御在江戸、別而 將軍様御前之仕合能候間、

其地も心易可被存事、

一去年秋、新納加賀守殿・最上土佐守殿を以、唐へ商買

之儀、兩人上着候而其元王位御返事之通承達候間、則

江戸へ申上候事、

一右御申分一段御為可然様子ニ候、無相違唐江銀子過分

ニ被差渡、御借銀返弁調候様ニ可有御談合候事、

一御借銀返弁不調候者、惣御國迷惑ニ罷成候間、琉球之儀も可為同前候、早竟者諸人之知行被召上ニ可罷成候、能々分別專一候事、

一冠船當年渡海之事未相聞得無、心元存候事、

一鹿甘入用之由被申候間、此節可被指渡事、

一加藤肥後守殿父子依重科被召上國、遠國へ流罪之事、

以上

寬永九年八月十四日

喜入攝津守
(忠繼)

琉球
三司官

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」五六〇号文書ト同一文書ナルヘシ)

薩广国八幡新田宮所司神官等^{⑧与}

當國宮里郷地頭大隅式部三郎忠光相諭免田以下事^{⑧充}

正応二年八月二日
陸奥守平朝臣^{北条宣時}

相模守平朝臣^{北条貞時}

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」九一八号文書ノ抄ナルヘシ)

313

八幡新田宮雜掌道海申、嶋津三郎兵衛尉實忠當宮免田
壹町御供⑥米 對捍事、

右、如解状者、當宮常見立用内、勢万勤免田御供米、

(当九)
南郷地頭實忠元享三年以来對捍之條無謂云々、任實忠

(狀脫カ)
承伏、遂結解、可令弁濟矣者、依仰下知如件、

元徳二年十月廿五日

(北条英時)
修理亮平朝臣

(本文書ハ「旧記雜録前編」一一五六四号文書卜同一文書ナルベシ)

右延享元十月史官召上、

314

一 永正二年乙丑十二月吉日、平右馬允重貴寄進五ヶ度御
渋谷
供米、

一 十六己卯十二月吉日、藤原忠俊御筆法花經于八幡宮御

宝前、

315

差出

右、往古妻帯座主ニ而候処、依口論所追放ニ被仰付候、

寛永十九年、清僧座主ニ被召替、名觀樹院、開山者先

護國院法印全有ニ而候、座主由緒書等妻帯座主追放之

砌不殘持參被申候由傳承候、隈之城ニ子孫有之、于今

文書等所持之由傳承及候、靈佛本尊之釈迦、脇立普賢・

文珠、新佛ニ而無御座候、是等之趣各御存知之通被仰

上可被下候、以上、

元禄四年末

十二月十一日

新田宮座主
觀樹院籠意

水引

御暖衆中

316

野田

白山御神領 在口裏

白山御神領

薩劬出水郡知識庄村之内

一 浮免

川はた

上田一段三畦十八歩

牧 助九郎

式石四升

同所 九畝廿四歩ノ内

上田六畦十四分

染川 甚左衛門尉

九斗七升

合田方三斛一升

已上

慶長十年

以上、

文久甲子

三月十三日

一乘院御房

御同宿中

(本文書ハ「旧記雜録後編四」四号文書卜同一文書ナルベシ)

覺

一 寶物櫃入

仁和寺宮御代之譜 全

一 入經藏宝物櫃 壹

一同 二

一 寶物櫃入 三

一同 四

一 寶物案内記下

一 御文書留記

一 御文書留帳

メ八冊

右者此節御用見合ニ付孰茂出精写方被致候得共、多々

書誤、且可書拔件等茂未相濟、旁為見合持越度候間、

可被聞召置、尤御用濟可差返ニ付、為其如此御座候、

文
書
目
録

例言

- 一 本巻に収めた「御家伝并諸家由緒」「国老并用人記」「御役人帳」「薩藩役職補任」「備忘抄」を、それぞれ掲載順に通し番号を付して収録した。
- 一 本目録のうち「御家伝并諸家由緒」は、島津家本巻頭記載の目録を大見出しとし、記載のないものは（）で示した。
- 一 文書は、番号のほか、年月日、文書名を記載した。
- 一 文書の年月日については、原文書記載の年紀はそのままとし、補筆の年紀は「」で囲んだ。また疑義の示されているものは「」で囲んで区別した。
- 一 年紀を欠くものうち、推定しうるものは（）で示した。
- 一 月の異称は数字に改めたが、正月、朔日、晦日などはそのまま残した。
- 一 原則として『鹿児島県史料 旧記雑録』及び『同 旧記雑録拾遺』にならい文書名を付けた。
- 一 重複等により省略した文書には※印を付し収録した。

文書目録

番号	年	月	日	文書名	番号	年	月	日	文書名
				御家伝并諸家由緒 〔御家伝并諸家由緒 一上〕					
				忠久公御誕生御由緒之事					
	一	(元禄十三年)	九月	朔日					
				島津綱寛					
				惟新公御日記					
	二			惟新公御日記					
				義久公御書					
	三	天正	廿年	五月					
				四日					
				島津龍伯 <small>義久書下</small>					
				諸家文書					
	四	(天文廿一年)	七月	三日					
				近衛植家書状					
	2	慶長十二年	十月	廿四日					
				島津龍伯 <small>義久書状</small>					
	3		七月	十八日					
				法印日承書状					
	4		六月	廿七日					
				近衛植家書状					
	5	(文禄三年)	十一月	十六日					
				島津忠恒書状					
				吉利家由緒書					
	五	(元禄十四年)	十二月						
				吉利忠名願書					
				平田家由緒書					
	六	(元禄十六年)	七月						
				肥後盛香・市来家年連 署調書					
				高城家由緒書					
	七	(元禄十六年)							
				高城十郎兵衛願書					
	2	(元禄十六年)	九月	三日					
				市来家年・田中国明連 署調書					
	八	(元禄十六年)	九月	六日					
				田中国明外二名連署調 書					
	九	(元禄十六年)	九月	十二日					
				記録所調書					
				諏訪家由緒書					
				一〇 (元禄十六年)					
				九月廿三日					
				諏訪市右衛門願書					
				新納家・本田家調書					
				一一 (元禄十六年)					
				十月					
				四日					
				田中国明外二名連署調 書					
				有馬勘助家筋由緒書					
				一二					
				十月					
				有馬勘助家筋由緒書					
				一三					
				十月					
				有川吉兵衛家筋由緒書					
				一四					
				九月					
				島津氏老臣書状案					
				一五					
				八月					
				七日					
				深見元泰由緒書					
				一六 (元禄十六年)					
				十月					
				六日					
				市来家年調書					
				一七					
				筑後・肥後兩國之住人					
				九州記人名拔書					
				平田九郎右衛門家由緒					
				一八 (元禄十六年)					
				十二月廿八日					
				田中国明・肥後盛香連 署調書					
				大山家由緒					
				一九 (元禄十六年)					
				十二月					
				廿五家御記録方調書					
				二〇 (元禄十六年)					
				十二月					
				肥後盛香外二名連署調 書					
				1					
				三原重房					
				2					
				本城源四郎嫡子					
				3					
				大島清太夫二男					

4

新納時昭

仁礼家由緒書

5

伊集院四郎兵衛

二二 (元禄十六年) 十二月廿五日

肥後盛香外二名連署調書

6

伊集院嘉左衛門嫡子

本田家由緒書

7

比志島兵次郎

二三 (元禄十六年) 十二月

記録所調書

8

田尻嘉兵衛

河野氏由緒書

9

伊集院猪右衛門

二四 (元禄十六年) 十一月

記録所調書

10

酒匂利兵衛

川上十郎左衛門嫡子川上伝十郎

記録所調書

11

上村安千代

二五

記録所調書

12

五代正助嫡子

山口甚九郎嫡子山口勘九郎

記録所調書

13

猿渡亀之允

二六

記録所調書

14

是枝周防坊

伊地知助右衛門嫡子伊地知少八郎

記録所調書

15

奈良原清左衛門嫡子

二七

記録所調書

16

上井犬千代

今井次右衛門

記録所調書

17

鹿島伝次郎

二八

記録所調書

18

長谷場覚太夫養子

折田治部左衛門

記録所調書

19

福屋兼慶

二九

記録所調書

20

伊東兵右衛門

家村平八嫡子家村

記録所調書

21

西丹下

三〇

記録所調書

22

市来権兵衛

酒匂利兵衛嫡子酒匂

記録所調書

23

外山九右衛門嫡孫

三一

記録所調書

24

白尾金左衛門

川上右京二男川上平八

記録所調書

「御家伝并諸家由緒 一下」

(廿五家御記録方調書)

二〇 25

伊地知重記

三三 龜山嘉兵衛二男龜山虎吉

記録所調書

平田監物家由緒書

伊地知重記

三四 高崎四郎右衛門弟高崎権之助

記録所調書

二一

(元禄十六年) 十二月廿四日

肥後盛香外二名連署調書

三五

記録所調書

町田権石衛門嫡子町田

三六

記録所調書

20 19

比志島氏
田尻氏

野田三静嫡子野田源太左衛門

三七

正月十一日

肥後盛香外二名連署調書

伊東家筋由緒書

五月廿六日

伊東全兵衛家筋由緒書

蒲生家調書

三八

十二月

田中国明外二名連署調書

()
四二

記録所調書

田中氏由緒書

三九

(元禄十七年)

二月

市来家年・肥後盛香連署調書

篠原氏由緒書

七月廿二日

猿渡信安外五名連署調書

(別本諸家大概記)

四〇

(宝永 元年)

三月廿五日

別本諸家大概

2 (宝永 元年)

八月廿四日

市来家年外二名連署調書

1

種子島氏

四四

宝永 元年

五月 十日

某覚書

2

諏訪氏

〔御家伝并諸家由緒 二上〕
(山口家由緒)

六月 (八日)

田中国明伺書

3

鎌田氏

四五

(貞享 四年)

四月十一日

德川家康起請文案

4

平田氏

四六

1 (慶長 七年)

四月十一日

山口直友書状

5

本田氏

四七

2 (慶長 八年)

十月 晦日

島津綱貴願書

6

高橋氏

四八

1 (天正十五年)

五月廿六日

豊臣秀吉朱印状抄

7

村田氏

四九

2 (天正十五年)

五月廿七日

豊臣秀長書状

8

三原氏

五〇

1 (天正十五年)

五月廿六日

島津綱貴願書

9

吉田氏

五一

寛文 二年

九月廿一日

島津久雄書付

10

土持氏

五二

寛文 八年

五月十一日

黒川正直口上覚

11

山田氏

五三

寛文 二年

九月廿一日

島津久雄書付

12

東郷氏

五四

寛文 二年

九月廿一日

島津久雄書付

13

志岐氏

五五

寛文 二年

九月廿一日

島津久雄書付

14

蒲生氏

五六

寛文 二年

九月廿一日

島津久雄書付

15

土岐氏

五七

寛文 二年

九月廿一日

島津久雄書付

16

秩父氏

五八

寛文 八年

五月十一日

黒川正直口上覚

17

秩父氏

五九

寛文 八年

五月十一日

黒川正直口上覚

18

秩父氏

六〇

寛文 八年

五月十一日

黒川正直口上覚

2 寛文 八年 五月十二日 伊集院忠兵衛答書
52 1 寛文 八年 七月(五日) 北条正房口上覚
2 寛文 八年 七月 六日 島津忠高答書

(菱刈家由緒書)
六七 十一月 十日 菱刈実洪覚書

53 延宝 元年 二月十四日 島津忠高書付
54 元禄 四年 三月 四日 島津惟久願書

〔御家伝并諸家由緒 二下〕
和田家由緒書

(祢寝家由緒書之覚)
55 (元禄 八年) 十一月十七日 伊地知重英口上覚
1 (元禄 五年) 十一月廿四日 伊地知重英覚書

小川氏由緒書
六八 正月十三日 和田家由緒書書拔
六九 1 小川喜兵衛由緒書書拔
2 二月十七日 小河氏由緒問状及答書付

56 (元禄 八年) 十一月十七日 田中国明口上覚
1 (元禄 五年) 十一月廿四日 田中国明覚書

2 鮫島刑部左衛門由緒書
七〇 二月 十日 鮫島刑部左衛門願書書拔
七一 蒲地氏由緒書
七月 蒲地休右衛門願書書拔

57 〔真享 四年〕 六月 九日 河野通古書付

蒲地氏由緒書
七一 本田家由緒書
七十二 郷田家由緒書

(畠山家由緒書)
58 (元禄十四年) 九月 阿多国儔願書

七十二 本田家由緒書
七十二 郷田家由緒書
十二月 六日 郷田源助由緒書

(島津弥市郎家由緒)
59 五月 某覚書

野村家由緒書
七三 三月廿二日 野村広貫願書書拔
七四 〔元禄 九年〕 三月廿二日 野村広貫願書書拔

(山田家由緒書)
六〇 十二月十一日 山田新助願書

宮原家由緒書
七五 七月廿二日 向井市之丞願書
七六 稅所家由緒書
七月廿二日 向井市之丞願書

(町田家由緒書)
六一 十二月 八日 町田久孝願書
六二 十二月十六日 田中国明調書

市来家由緒書
七六 十月十二日 田中国明調書
七七 東郷・宮原両家調書
九月十四日 田中国明調書書拔

(北条家訴状)
六三 九月十六日 北条時弘願書

東郷・宮原両家調書
七八 1 記録書調書

(伊藤家由緒書)
六四 寛永十一年 十一月十九日 伊藤権右衛門覚書

市来家由緒書
七六 十月十二日 田中国明調書

(平山家由緒)
六五 四月十七日 平山忠高願書

東郷・宮原両家調書
七八 1 記録書調書

(遠矢家由緒書)
六六 遠矢良歳願書書拔

東郷・宮原両家調書
七八 1 記録書調書

文書目錄

宇都宮家由緒書	2	十月 二日	田中国明調書	八八	六月廿二日	中西秀乘願書
七九			鮫島仲兵衛願書	八九		土持次郎九郎願書
酒匂家由緒書	八〇	八月 五日	酒匂景義願書	九〇	二月廿五日	肥後盛香調書
新納家由緒書	八一	正月	新納久喜願書	九一	二月廿五日	市来家年外二名連署調書
大島家由緒書	八二	六月 二日	大島有以願書	九一	二月十八日	田中国明外二名調書
〔御家伝并諸家由緒 三〕						秩父十郎兵衛
市来家由緒書	八三	九月 三日	市来家年口上覚			碓山仲左衛門
	1	(元禄十四年)				平山伊兵衛
	2	(元禄十四年)	市来家永口上書			川上長左衛門嫡子
新納家由緒書	八四	十一月 三日	新納久壽願書			新納市右衛門嫡子
	1	五月廿七日	島津義久代国分御番帳			川上左京二男
	2					長谷場源助
野元家由緒書	八五	二月十八日	野元長綱願書			郷田源助
	1	正月十三日	三原諸右衛門書付			伊東甚兵衛
	2	二月十三日	伊地知重昶書付			関喜右衛門
	3	元禄十二年	三原重庸書状			伊東權角
	4	正月 六日	德永善左衛門願書			本田与兵衛嫡子
德永家由緒書	八六	二月十四日	相良甚左衛門願書			川上八郎左衛門
相良家由緒書	八七	二月(六日)				淡谷三四郎
中西家由緒書						相良清兵衛嫡子
						仁礼覚之允
						平田五次右衛門嫡孫
						野村源左衛門嫡子
						和田平七

九二 26 25 24 23 22 21 20

小番可被仰人数

九三

(元禄十六年)

四月廿七日

1 2 3 4 5 6 7 8

元禄十三庚申年頭御座配

志岐・田尻兩家之事

川上式部家筋年頭進上之事

山田七郎右衛門右同

大島清太夫右同

山田市郎兵衛右同

一所衆列之事

御座配之事

九四

海江田外記嫡子

黒葛原少右衛門二男

町田孫兵衛

川上益右衛門

伊集院覚左衛門嫡子

川上孫左衛門二男三男

中神七右衛門

田中国明調書

肥後盛香・市来家年連
署調書

大島清太夫

町田勘左衛門

伊勢八右衛門

森川理右衛門

伊集院新之允

伊勢弥三郎

三原九兵衛

川上益右衛門

比志島宮内少輔御仕置被仰付候際仰出之御書付

九五

十二月 晦日 島津家久書付

本田刑部少輔調之事

九六

閏八月十七日 記録書返書

上井秀秋之事

鮫島双月事

桑波田孫六

九七

五月廿六日 市来家年返書

伊集院下野由緒調

九八

二月十一日 肥後盛香返書

校名帳并目安 御一見状之訊返答書

九九

四月廿三日 市来家年返書

仁礼景代系図之覚

一〇〇

某覚書

(諸家系図)

一〇一

秩父氏系図

一〇二

比企氏系図

一〇三

佐多氏系図

一〇四

市来氏系図

一〇五

帖佐太郎系図

一〇六

藤原泰衡系図

一〇七

祢寝氏系図

一〇八

梶原氏系図

一〇九

田部姓土持氏系図

〔御家伝并諸家由緒 四〕

(惟宗氏)

一一〇

1

惟宗氏系図

文書目録

文書名	頁数	成立年代	成立日	内容	所収文書	備考
酒匂家由緒書	5	(元禄 七年)	十二月十六日	伊地知重英上書	一八九 (宝永 元年)	酒匂兵右衛門願書
市米政家系図案	4	某書付		伊木半七郎由緒書	一〇〇 (宝永 二年)	伊木半七郎由緒書
大隅修理助系図	3			赤松家由緒書	一一一 (諸家系図)	某調書
赤松家由緒書	2			赤松則茂家筋由緒申出書		赤松則茂家筋由緒申出書
赤松則茂家筋由緒申出書	1		三月廿二日	赤松則茂家筋由緒申出書		赤松則茂家筋由緒申出書
赤松次郎右衛門由緒書	1	(元禄 八年)	五月 十日	伊地知重英覺書	2	赤松次郎右衛門由緒書
赤松次郎右衛門由緒書	1	(元禄 七年)	十二月廿八日	伊地知重英覺書	3	赤松次郎右衛門由緒書
赤松次郎右衛門由緒書	1	(寛永十五年)	二月廿五日	島津久元外三名連署書	4	赤松次郎右衛門由緒書
島津家歴代書上	2			島津家歴代書上		村尾家由緒書
島津家歴代書上	3			島津家系図	一一二 [宝永 二年]	村尾源左衛門口上書
島津家并本田家歴代書上	4			宮原家由緒書	一一三	仁礼覺之丞願書
伊地知重英口上覺	5	(元禄 七年)	十二月十二日	伊地知重英口上覺	1	宮原氏系図
伊地知重英口上覺	6			某覺書		岩切氏系図
田中国明書状	7	(元禄 七年)	十二月十二日	田中国明書状		記録所調書
伊地知少八郎書状	8	(元禄十五年)	三月廿七日	伊地知少八郎書状	一二五	
島津光久葬礼役者并拝領物調書	一六			島津光久葬礼役者并拝領物調書	一二六	本田信次郎申状
酒匂利兵衛由緒届書	一七		十一月十八日	酒匂利兵衛由緒届書	2 (宝永 四年)	本田信次郎願書
酒匂利兵衛家略系図	1			酒匂景宗一流系図		本田氏系図
酒匂景宗一流系図	2			吉利家由緒書	一二七	吉利氏系図
吉利家由緒書	2			吉利忠名由緒書	一二八	川上左京系図
吉利忠名由緒書	1		九月 十日	酒匂兵右衛門家筋之由緒	一二九	猿渡新右衛門系図
酒匂兵右衛門家筋之由緒	1				一三〇	

一三一 元禄十六年 十一月 四日 (頼朝公法名ノ件)

一三二 本田新助系図 久松流略譜

満家院厚地村華尾山御由緒書

一三三 (宝永 元年) 二月十八日

市来家年外二名連署調書

(猿渡法楽跡調)

一四二 1 宝永 五年

三月十八日 某調書 猿渡信安覺書

1 享禄 四年 三月 八日

島津勝久書下

(忠国公御法名件)

2 享禄 四年 三月 八日

島津勝久書下

一四四

某書付

3 延徳 三年 三月廿七日

一宮大明神棟札 田中国明外二名連署調書

(市来氏) 一四五 1 元禄十五年

正月廿一日 田中国明・肥後盛香連署覺書

東俣村一宮大明神之御由緒書

一三五 1 (宝永 五年) 五月廿二日

肥後盛香・田中国明連署調書

2 (元禄十五年) 正月廿五日

田中国明・肥後盛香連署覺書

一三六 (宝永 五年) 七月廿八日

寺社奉行所調書 肥後盛香・田中国明連署調書

(伊作家事件) 一四六 (寛文十三年) 正月 二日

島津氏家老申渡書 島津久竹・島津忠廣連署申渡書

一三七 仁治 三年 十月十四日

薩摩国満家院厚智山四至境定書

一四八 万治 二年 正月十三日

島津久豫口上覺

(御目見列調)

一三八

御目見列定書

一四九 万治 二年 正月十三日

島津久竹書付留

(二乗院由緒)

一三九

記録所調書 坊津一乗院旧蔵文書

1 延宝 六年 十二月廿九日

島津光久仰出

()

一四〇

諸家大概拔書

2 延宝 七年 三月 三日

肝付久兼上書

不断光院并下伊敷両所春日大明神御由緒

一四一 1 正月十八日

不断光院由緒書 春日大明神由緒書付

3 延宝 七年 三月 十日

島津光久仰出 御用帳写

3 享禄 四年 二月十九日

島津勝久書下

10 (延宝 七年) 十二月廿七日

島津久竹口上書

文書目錄

備忘抄
「備忘抄 上」

薩藩役職補任
「薩藩役職補任」

御役人帳
「御役人帳」

国老并用人記
「国老并用人記」

11	(延宝 八年)	正月 五日	島津久竹覚書
12	(貞享 二年)	十二月廿三日	河野通古覚書
13	延宝 七年	三月 一日	記録所日帳写
14	(貞享 二年)	十二月廿五日	島津久竹書狀
15	(貞享 二年)	十二月廿五日	野田勘兵衛返書
16	(貞享 二年)	十二月廿六日	島津久竹口上覚
17		五月廿一日	島津久竹覚留
18		六月 三日	野田勘兵衛書狀
19	(貞享 五年)	七月 五日	島津久竹覚留
20	(貞享 五年)	九月 四日	田中国明・伊地知重英 連署口上覚

一	「正徳 三年」	閏五月	記録所調書
二	「享保 三年」	十一月	種子島久基申渡書
三	元文 元年	十二月	島津久貫達書
四		十二月廿八日	小林政一取次申渡書

参考源平盛衰記

二	東鑑	忠久下向日記
三	百練抄	
四	山槐記	
五	山槐記	
六	東鑑	
七	金鐘寺書出	
八	鎌田政佐譜	
九	古系図目錄	
一〇	島津相馬系図	
一一	島津忠久系図	
一二	島津忠久系図	
一三	島津忠久系図	
一四	源頼政系図	
一五	島津忠久系図	
一六	川上久尚系図文書	
一七	島津忠久系図	
一八	島津忠久系図	
一九	島津忠久系図	
二〇	記録所日帳	
二一	肥後盛香・市来家年連 署書狀	閏八月十九日 八月廿五日 九月 二日
二二	某書付	
二三	小野氏千代王丸書付	
二四	從清盛至頼朝代天皇即位次第	
二五	某書狀	
二六	島津家文書古目錄	

二七	1		島津忠久系図	五二		島津忠久系図
二八	1		島津相馬系図	五三		明月記
二九	2		忠明一流系図	五四		明月記
三〇			源氏系図	五五		島津忠久記事
三一			近衛基通一流系図	五六	七月	市来太郎左衛門屈書
三二			島津忠久系図	五七	九日	惟宗康友系図
三三			島津忠久伝承書付	五八		幕之文并島津忠久系図
三四		(元祿 十年)	島津忠久伝承書付	五九		平良文一流系図
三五		六月廿七日	野田噯二名連署口上覚	六〇		島津忠久伝承記事
三六			島津御家記	六一		島津忠久伝承記事
三七			御家記録抄	六二		島津忠久伝承記事
三八			島津先祖代々次第	六三		佐々木氏系図抜書
三九			島津氏惟宗氏時之系図	六四		島津忠久系図抜書
四〇			島津忠久系図	六五		島津忠久系図
四一	1		源義経系図	六六		源頼政一流系図
四二	2		御当家始書	六七		島津忠久系図
四三	1		御当家始書	六八		貴島氏系図
四四	2		島津忠久西国下向記	六九		島津忠久伝承書付
四五	1		島津忠久下向騎馬日記	七〇		島津忠久伝承書付
四六		文治 五年	惟宗忠久下文	七一		源頼政一流系図
四七		十一月	北条義時書状	七二		秩父氏系図并鎌倉志
四八		五月 九日	関東御教書	七三		近衛基実系図
四九		十月廿七日	島津忠久安堵状	七四		大友氏系図
五〇		十一月廿六日	関東下知状	七五		安達氏系図
五一		五月(八日)	関東下知状	七六		源範頼一流系図
		七月十二日	島津忠久伝承書付	七七		鎌倉実記
			藤原忠通一流系図	七八		鎌倉実記
			島津忠久系図		2	
					1	

文書目錄

頁	書名	年	日	備考
七九	大日本史			本田貞親記事
八〇	保曆間記			本田貞親系図書拔
八一	大日本史			島津忠久伝承書付
八二	東鑑			宝鑑文書目錄
八三	源頼朝下文案抄	寿永三年	四月 六日	源頼朝御教書抄
八四	東鑑			源頼朝御教書抄
八五	大慈寺仏舍利由緒書			源頼朝御教書抄
八六	大日本史			北条貞顕記事
八七	保曆間記			東鑑考
八八	東鑑			板本東鑑跋抄
八九	安達泰盛副狀	建治二年	八月廿八日	板本東鑑跋抄
九〇	安達泰盛書狀	建治二年	十二月 十日	東鑑五十二卷本考
九一	關東鎮西文書目錄			東鑑脫漏考
九二	新板大系図平氏廿三			百鍊抄并金沢文庫考
2	新板大系図藤氏十			東鑑脫漏
3	新板大系図源氏廿二			二階堂某書狀
4	新板大系図源氏廿四			鮫島光家申狀抄
				惟宗氏系図
				島津忠久系図
				源頼朝御教書
				山田聖栄自記
				島津氏系図
				島津久通外二名連署書
				狀
				林鶯峯書狀
				島津忠久記事
				寛永諸家系図伝
				島津久通覚書
一〇一	吉井友利萬扣書写			
一〇二	大日本史			本田貞親記事
一〇三	保曆間記			本田貞親系図書拔
一〇四	大日本史			島津忠久伝承書付
一〇五	東鑑			宝鑑文書目錄
				源頼朝御教書抄
				源頼朝御教書抄
				源頼朝御教書抄
				北条貞顕記事
				東鑑考
				板本東鑑跋抄
				板本東鑑跋抄
				東鑑五十二卷本考
				東鑑脫漏考
				百鍊抄并金沢文庫考
				東鑑脫漏
				二階堂某書狀
				鮫島光家申狀抄
				惟宗氏系図
				島津忠久系図
				源頼朝御教書
				山田聖栄自記
				島津氏系図
				島津久通外二名連署書
				狀
				林鶯峯書狀
				島津忠久記事
				寛永諸家系図伝
				島津久通覚書
一一一	吉見頼興書狀	大永三年	二月廿六日	
一一二	島津忠朝書狀	大永三年	七月廿一日	
一一三	河越氏系図			
一一四	藤原俊忠一流系図			
一一五	藤原忠隆一流系図			
一一六	葉室氏系図			
一一七	藤原忠通一流系図			
一一八	藤原公実一流系図			
一一九	吉井友利萬扣書写			
一二〇	吉井友利萬扣書写			
一二一	慶安三年		四月十一日	
一二二	寛文十年		三月廿九日	
一二三	寛文十年		三月廿九日	
一二四	寛文十年		八月廿三日	
一二五	寛文十年		八月廿三日	

一一六									異体字書上	一五〇									島津相馬系図
一二七	1	元禄 十年	二月	記録所日帳	一五一				島津忠久伝承記事										島津忠久伝承記事
一二八		(元禄 十年)	二月十二日	田中国明覚書	一五二				安倍泰親伝										安倍泰親伝
一二九			八月十四日	山田次郎右衛門尉覚書	一五三				百鍊抄										百鍊抄
一三〇				某書付	一五四				山槐記										山槐記
一三一				古記録書上	一五五				島津忠久没年記事										島津忠久没年記事
一三二				作者部類	一五六				島津忠久伝承記事										島津忠久伝承記事
一三三				島津忠久下向記事	一五七				東寺長者補任										東寺長者補任
一三四				後藤氏系図	一五八				玉海										玉海
一三五		元暦 元年	十二月	島津忠久下向記事	一五九				山槐記										山槐記
一三六				源範頼御教書案	一六〇				玉海										玉海
一三七				田部某書状	一六一				吉記										吉記
一三八				藤原某奉書案	一六二				若狭島津氏系図										若狭島津氏系図
一三九		建久 三年	十月廿二日	東鑑	一六三				島津図書覚書										島津図書覚書
一四〇				関東御教書	一六四				某覚書										某覚書
一四一				五番箱系図目錄	一六五				内藤光広書下										内藤光広書下
一四二				島津家文書系図目錄	一六六		大永 八年	八月十九日	大日本史										大日本史
一四三	1			川上久尚系図抜書	一六七				島津綱貴譜										島津綱貴譜
一四四	2			古記録書上		2	(元禄十三年)	三月	抄										島津氏日向国領知由来
一四五				新納忠勝筆記抜書		3	(元禄十三年)	三月 九日	抄										島津氏日向国領知由来
一四六	1	[宝永 五年]	十二月廿二日	川上義久記事		4	(元禄十三年)	三月	島津忠雄書状										島津氏日向国領知由来
一四七	2	宝永 六年	二月 二日	税所氏系図		5	(元禄十三年)	三月 七日	抄										島津氏日向国領知由来
一四八				大山平右衛門書状		6	(元禄十三年)	三月 七日	進藤長之書状										進藤長之書状
一四九				田中国明・肥後盛雄連署書状		7	(元禄十三年)	十一月十四日	今大路孝在書状										今大路孝在書状
				新編鎌倉志		8	(元禄十三年)	十一月十四日	菊池新三郎覚書										菊池新三郎覚書
				龜山三郎兵衛覚書		9	(元禄十三年)	十二月	島津家由緒書付										島津家由緒書付
				島津氏系図		10	(文化 二年)	十二月	木村右京覚書										木村右京覚書

文書目録

一七〇	寛保 二年	六月 三日	野田郷若宮大明神由緒調	一八八	文治 二年	正月十五日	島津忠久下向記事
一七一	〔元禄 十年〕	六月廿七日	野田嘜二名連署口上覚	一八九	元禄 十三年	十一月十六日	草部重兼注進状案
一七二	文政 七年	六月廿五日	野田由緒改帳	一九一	元徳 二年	七月	島津庄雜掌承信申状
一七三	寛保 二年	六月十三日	野田嘜四名連署届書	一九二	寛喜 二年	十一月	関東下知状案
一七四	文政 七年	七月	高尾野郷士年寄二名連署届書	一九三			日置兼秀申状案
一七五	慶長十九年	八月 二日	町田久幸外三名連署知行目録	一九四	寛元 元年	十二月廿二日	全慶奉書案
一七六	元和 三年	正月廿七日	樺山久高知行名寄目録	一九五	正応 五年	八月 三日	関東御教書
一七七	享和 二年	三月	野田郷士年寄等三名連署届書	一九六	寛元 元年	八月 七日	関東御教書案
一七八	寛政 七年	十二月十五日	野田郷士年寄四名連署届書	一九七	寛元 二年	十一月 廿日	関東下知状案
一七九	文政 七年	六月廿五日	中村郷兵衛・橋口清左衛門連署届書	一九八	寛元 二年	六月廿四日	六波羅御教書
※	慶長十九年	八月 二日	町田久幸外三名連署知行目録	一九九	建長 七年	十二月廿五日	救仁院・安樂氏系図
1	享保 九年	八月廿八日	出水郡野田下名村檢地竿次帳并付記	二〇〇			関東下知状
一八〇			字義書上	二〇一	1 (文治 五年)	八月十五日	源頼朝加判平盛時奉書頭書
一八一			惟宗氏系図	二〇二	2 文治 三年	三月	平重澄寄進状案十訓抄
一八二			島津忠久下向年紀考	二〇三	寛喜 二年	十一月	関東下文案
一八三			猿渡家通考家譜	二〇四	天福 二年	五月 一日	関東御教書案
一八四			島津忠久下向時役人交名	二〇五	仁治 二年	十月十七日	六波羅下文
一八五	永禄 三年	十月 吉日	関東御教書	二〇六	宝治 二年	七月十九日	関東御教書
一八六	〔建久 九年〕			二〇七			日置姓北郷氏系図
				二〇八			平貞元一流系図
				二〇九	貞応 二年	九月廿九日	治部坊玄成一류系図
				二一〇			関東下知状案
				二一一			古記録書上

二二二	永祿十一年	正月 三日	煎硝唐人林一官記事	二三七	字義書上
二二三			林一官系図	二三八	島津久慶覚書
二二四	建曆三年	九月 一日	古記録書上	二三九	鎌田氏記事
二二五		十一月廿三日	大江親広下文案		
二二六			川上頼久宛行状		
二二七			小川氏系図		
二二八			古今要用之記	二四〇	備忘抄 下
二二九			平良道一流系図	二四一	
二三〇			古記録書上	二四二	
二三一			平貞元一流系図	二四三	
二三二	建曆三年	四月	古記録書上	二四五	応安 七年 六月廿二日
二三三	(文治三年)	五月 三日	僧智恵申状	二四六	市来忠家目安状
二三四			源頼朝御教書	二四七	島津龍伯義直書
二三五			古記録書上	二四八	細川高国書状
二三六			島津忠久系図	二四九	古記録書上
二三七			古記録書上	二五〇	島津義虎書状抄
二三八			小野氏系図	二五一	古記録書上
二三九			八田宇都宮等系図	二五二	那須宗治記事
			祢寝院志々目弁済使系図	二五三	某書付
二四〇			大祢寝院弁済使職相伝次第	二五四	時盛記事
二四一	文治二年	正月	僧安兼解	二五五	年代記
二四二			島津忠久下向記事	二五六	諸氏系図文書書上
二四三			清和源氏歴代	二五七	某(伊地知季安力)覚書
二四四			島津忠久伝承記事	二五八	諸氏系図文書書上
二四五			島津忠久系図抜書	二五九	二階堂行久讓状
二四六			島津忠久系図抜書	二六〇	二階堂行久讓状
二四七			島津忠久系図抜書	二六一	除目聞書抄
二四八				二六二	関東下知状
					用語書上

文書目録

二六三											
二六四					天文廿四年	三月十七日	国分正興寺玄俊口上覚	二八二	寛永十二年	正月十二日	島津久慶外二名連署書
二六五					二月 六日		島津貴久願文	二八三	寛永十二年	七月 九日	三与支配所知行目録
二六六					法名書上		北條時頼落飾記事	二八四			山下弥右衛門記事
二六七					島田隱岐介系図		島田隱岐介系図	二八五			島津勝久系図
二六八					高城耳川合戦記事		高城耳川合戦記事	二八六			伊勢貞昌書状
二六九					菱刈重種一流系図		菱刈重種一流系図	二八七			新納忠清書状
二七〇					慶長十四年 八月十六日		大山稻介 <small>佐々木</small> 覚抄	二八八			新納忠清書状
二七一					慶長十一年 六月 吉日		池田出雲守覚書	二八九			用語書上
二七二					諸氏系図文書等書上		諸氏系図文書等書上	二九〇	(寛永 九年)	八月廿七日	新納忠清・最上義時連 署条書
二七三					仁礼景晴譜		仁礼景晴譜	二九一			川上久林譜
二七四					天正年中日々記		天正年中日々記	二九二			島津国史
二七五					島津義弘室上洛御供衆 賦		島津義弘室上洛御供衆 賦	二九三			島津延久記事
二七六					御質様御供衆賦銀渡方 帳		御質様御供衆賦銀渡方 帳	二九四			面高氏年代記
二七七	天正 十年	二月廿四日	上津浦鎮貞書状	二九六	永仁 二年	八月十八日	山城守親嵩覚書				鎌田政昭覚書
二七八	慶長 七年	五月廿三日	加藤清正書状	二九七	承応 四年	五月十一日	新納忠勝系図				小野氏系図
二七九		正月十四日	加治木新納家文書	二九九	文治 三年	三月	平重澄寄進状案				谷山佐渡系図
		三月廿八日	穎娃久政・新納忠清連 署書状	三〇〇			山崎氏系図				光空島津貴久年忌追悼 詩
		(七月廿三日)	新納忠清・高崎能乘連 署書状	三〇一			村田経房系図				龜山忠弘系図
		正月 七日	新納久正書状	三〇三			某書付				平徳重覚書
二八〇			慶長十九年日々記	三〇四							
二八一	(慶長 四年) 閏三月 朔日		桂忠詮外十名連署書状	三〇六	寛正 五年						

三〇七	(天正 四年)	十一月 六日	天草鎮尚書狀
三〇八			慶長十九年日々記
三〇九	寛永 九年	六月廿五日	新納忠清書狀
三一〇	寛永 九年	七月廿三日	新納忠清書狀
三一一	寛永 九年	八月十四日	喜入忠統条書
三一二	正応 二年	八月 二日	関東下知狀抄
三二三	元徳 二年	十月廿五日	鎮西下知狀
三二四			八幡新田宮寄進記事
三二五	元禄 四年	十二月十一日	新田宮座主觀樹院龍意 届書
三二六	慶長 十年		白山神領知行目録
三二七	文久 四年	三月十三日	記録所書付

鹿児島県史料編さん関係者

史料編さん 東京大学
顧問 史料編纂所所長 榎原雅治

国立歴史民俗博物館前館長 宮地正人

鹿児島大学名誉教授 五味克夫

九州大学名誉教授 安藤保夫

委員 原口泉 晋藤哲哉

三木靖 日限正守

宮下満郎 塩満郁夫

堂満幸子

鹿児島県歴史資料センター黎明館

館長 高山大作

副館長 松山美朗

調査史料室長 内倉昭文

学芸専門員 崎山健文

資料調査編集員 梶ヶ山梨沙 黒川智世

中野尚子 村山麻美

堀田未希

鹿児島県史料

旧記録録拾遺 記録所史料二

平成 25 年 3 月 1 日 発行

非売品

編集 鹿児島県歴史資料センター黎明館

発行 鹿児島県

印刷所 凸版印刷株式会社